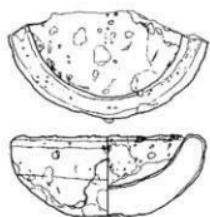


はか
博 多 169

— 博多遺跡群第217次調査報告書 —

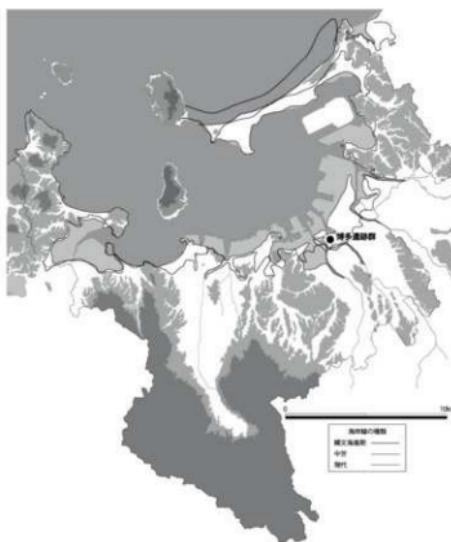


2020

福岡市教育委員会

はか
博 多 169

— 博多遺跡群第217次調査報告書 —



遺跡番号 HKT-217
調査番号 1734

2020

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されており、それらを保護し、後世に伝えることはわたくし子どもの重要な責務であります。

しかしながら、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実です。そのため、本市では、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録を残すことで後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、博多遺跡群第217次調査について報告するものです。本調査では平安時代から戦国時代を中心とする遺構や豊富な遺物が出ており、中世都市博多の街区や、中世の聖福寺境内を復元するうえで重要な成果をあげることができました。

今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、UNITED REALTY株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区御供所町264番・265番・266番の共同住宅建設工事に先立ち、平成29（2017）年度に実施した博多遺跡群第217次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、附1を屋山洋、附2を松園菜穂・比佐陽一郎が担当し、そのほかの執筆と編集は神啓崇が担当した。
3. 本書の遺構実測図は上角智希・神、遺物実測図・拓影・製図は神が担当した。
4. 本書の遺構写真は上角・神、遺物写真は神、遺物エックス線写真は松園が撮影した。
5. 本書の遺構実測図中の方位はすべて磁北で、真北より $7^{\circ} 20'$ 西偏する。
6. 本書掲載の座標は世界測地系で、標高は都市再生街区基準点2A110 (H=5.517m) を基準とした。
7. 検出遺構は、検出順に通し番号を付けた。ただし、S Pのみ分けて101番以降を付けている。
8. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
S D 溝 S E 井戸 S K 土坑 S P 柱穴 S X 不明遺構
9. 金属遺物の保存処理は松園が担当した。
10. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。
11. 本文中の陶磁器分類は以下の文献に拠る。
宮崎亮一編 2000『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編ー』(太宰府市の文化財 第49集)
12. 本文中の土師器・陶磁器の時期は、以下の文献を参考にした。
楠瀬慶太 2007『土師器食膳具から見た中世博多の土器様相』『九州考古学』82 pp.21-43
宮崎亮一編 2000『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編ー』(太宰府市の文化財 第49集)

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	217次	調査略号	HKT217
調査番号	1734	分布地図図幅名	天神	遺跡登録番号	0121
事業対象面積	486.45m ²	調査面積	232m ²	事前審査番号	28-2-872
調査期間	平成29（2017）年11月27日—平成30（2018）年3月13日				
調査地	福岡市博多区御供所町264番・265番・266番				

題字「博多」は筑紫豊先生の揮毫による（福岡市教育委員会文化課1976）。

本文目次

I	はじめに	1	
1.	調査にいたる経緯	1	
2.	調査体制	1	
II	遺跡の立地と歴史的環境	2	
1.	遺跡の立地	2	
2.	遺跡の歴史的環境	2	
III	発掘調査の記録	4	
1.	調査の経過と概要	4	
2.	基本層序	4	
3.	各遺構面の概要	5	
(1)	第1面の調査	5	
(2)	第2面の調査	5	
4.	遺構と遺物	8	
(1)	溝	8	
S D001	8	S D019	15
S D002	13	S D070	17
S D012	14	S D073	17
(2)	井戸	17	
S E003	17	S E065	18
S E024	18		
(3)	土坑	19	
S K004	19	S K009	21
S K006	19	S K021	21
S K007	20	S K025	22
S K008	20	S K058	22
(4)	その他	23	
遺構出土遺物	23	遺構外出土遺物	24
IV	結語	25	
1.	本調査地点の成果	25	
2.	中世都市博多の「メインストリート」と聖福寺	25	
3.	聖福寺門前における鍛冶	25	
附1	博多遺跡群第217次調査出土動物遺存体(屋山 洋)	29	
附2	博多遺跡群第217次調査出土資料の保存科学的調査(松園菜穂・比佐陽一郎)	31	

挿図目次

図1	博多遺跡群発掘調査地点	3
図2	第217次調査地点位置図(S=1/500・1/2000)	4
図3	調査区南東側土層図(S=1/50)	5
図4	調査区第1面遺構配置図(S=1/100)	6
図5	調査区第2面遺構配置図(S=1/100)	7
図6	S D001遺構実測図(S=1/150)	8
図7	S D001土層図(S=1/50)	9
図8	S D001粘質土出土遺物実測図(S=1/3・25はS=1/1)	9
図9	S D001砂質土出土遺物実測図(S=1/3)	10

図10	SD001出土遺物実測図（1）（S=1/3）	11
図11	SD001出土遺物実測図（2）（S=1/3・127はS=1/1）	12
図12	SD002遺構実測図（S=1/100）・土層図（S=1/50）	13
図13	SD002出土遺物実測図（S=1/3）	13
図14	SD012出土遺物実測図（S=1/3）	14
図15	SD019出土遺物実測図（S=1/3）	15
図16	SD070遺構実測図（S=1/100）・土層図（S=1/50）	16
図17	SD070出土遺物実測図（S=1/3）	16
図18	SD073出土遺物実測図（S=1/3）	17
図19	S E003遺構実測図・土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	17
図20	S E024・S E065遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	18
図21	S K004遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	18
図22	S K006遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	19
図23	S K007・S K008遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	20
図24	S K009遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	21
図25	S K021遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	22
図26	S K058遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	22
図27	S K025遺構実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）	22
図28	その他遺構出土遺物実測図（S=1/3）	23
図29	その他遺構・遺構外出土遺物実測図（S=1/3・389はS=1/2）	24

表 目次

表1	聖福寺周辺の調査地点と関連する内容	2
表2	出土銭一覧	26
表3	遺構一覧	27
表4	出土動物遺存体一覧	30

写真図版 目次

Ph.1	SD012完掘状況（北東から）	15	Ph.15	199 (SD070暗褐色粘質砂)	39
Ph.2	調査区出土金属生産関連遺物	35	Ph.16	352 (SP116)	39
Ph.3	II区第2面全景（西から）	35	Ph.17	171 (SD012)	39
Ph.4	I区第1面全景（北東から）	36	Ph.18	172 (SD012)	39
Ph.5	I区第2面全景（北東から）	36	Ph.19	311 (SK009)	39
Ph.6	SD001 完掘状況（西から）	37	Ph.20	113 (SD001)	39
Ph.7	SD001 B-B'土層断面（北西から）	37	Ph.21	189 (SD019)	40
Ph.8	SD002 C-C'土層断面（北西から）	37	Ph.22	134 (SD001)	40
Ph.9	SD002 D-D'土層断面（北西から）	37	Ph.23	177 (SD012)	40
Ph.10	SD019 動物遺存体出土状況（南西から）	38	Ph.24	23 (SD001)	40
Ph.11	SD070 E-E'土層断面（南東から）	38	Ph.25	380 (II区第1面検出)	40
Ph.12	SD019 全景（北西から）	38	Ph.26	玩具集合	40
Ph.13	II区第2面全景（北東から）	38	Ph.27	370 (SK059)	40
Ph.14	351 (SP203)	39	Ph.28	銭23 (SK006)	40

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区御供所町264・265・266番の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財有無の照会（申請番号28-2-872）を平成29年1月10日付で受理した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群内にあり、周辺で数次の発掘調査が実施されているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。また、申請地は聖福寺の門前で、同寺院にかかる遺構が出る可能性があった。これを受け埋蔵文化財課事前審査係が平成29年11月6日に現地で確認調査を実施し、現地表面下1.5mで遺構を確認したため、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、工事によって破壊される部分について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成29年5月11日付でUNITED REALTY株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年11月27日から発掘調査を、平成30・令和元年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会

調査委託 UNITED REALTY株式会社

〔発掘調査 平成29年度〕

調査総括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課 課長	常松 幹雄
	同課調査第1係長	吉武 学
調査庶務	埋蔵文化財課管理係	松原 加奈枝
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係	上角 智希・神 啓崇

〔整理・報告 平成30・令和元年度〕

整理・報告総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	大庭 康時（平成30年度） 菅波 正人（令和元年度）
	同課調査第1係長	吉武 学
整理・報告庶務	文化財活用課管理係	松原 加奈枝
整理・報告担当	埋蔵文化財課調査第1係	神 啓崇

調査期間中には、埋蔵文化財課の木下博文、山本晃平の協力を得た。また、報告書執筆にあたり、以下の諸氏にご教導を賜った。記して深謝する。

江藤彰彦、大庭康時、加藤良彦、佐藤一郎、田上勇一郎、武末純一、西垣彰博、松田麻里、
宮野弘樹、桃崎祐輔
(五十音順・敬称略)

II 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

博多遺跡群は、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上にあり、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代開墾の石堂川（三笠川）、南は石堂川の開墾以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（三笠川）によって画される。基盤層の砂丘は、現地表の起伏から推定すると微高地が3列確認でき、内陸側から砂丘Ⅰ・砂丘Ⅱ（博多浜）、砂丘Ⅲ（息浜）と呼ぶ。地山（基盤層）は褐色砂層で、「箱崎砂層」とも呼ばれる（下山1989）。砂は石英質ないし真砂質で、海浜砂層を主体とする。砂層の分布は博多湾南岸に沿って、東区箱崎から馬出、博多区呉服町中洲、中央区天神・荒戸・知行、早良区西新をへて室見川河口に至る（下山1998）。第217次調査地点は砂丘Ⅱの中央やや北東寄りに位置する。

2. 遺跡の歴史的環境

遺跡全体の歴史的環境は、既報告や概説書（大庭ほか編2008・大庭2009など）を参照いただき、本報告では聖福寺周辺の歴史的環境と既調査成果を述べる。

安国山聖福寺は、日本臨禪宗の開祖・明庵栄西が建立した臨済宗妙心寺派（当初は建仁寺派）の寺院で、博多区御供所町6-1にある。創建は建久6（1195）年（『元亨釈書』）または元久元（1204）年（『聖福寺仏殿記』）とされる。聖福寺に伝わる「栄西申状」には、当寺が建立された「博多百堂の地は、かつて宋人が堂舎を建立した旧跡で、現在は空地となっているが仏地であるため人が居住していない。そこで、栄西が寺を建立して本尊を安置し鎮護国家を祈ることを願い出した結果、源頼朝から許可された」と記される（伊藤2008：p. 224）。

聖福寺には、永祿6（1563）年以前の境内を描いた「聖福寺古図」、天文12（1543）年の境内の土地貸賃を記した『安山僧屋牒』が伝わり、当時の境内・町並み復元に重要な示唆を与える。鏡山猛の研究（1971）を嚆矢として、宮本雅明（1991）らが復元を試みた。ただし、『安山僧屋牒』にある町名には現在の地籍から辿れないものもあり、課題が残る。一方で、境内・町並み復元は博多遺跡群の発掘調査で着実に成果を挙げている（表1）。まず、寺域を画する溝や道路遺構の検出が注目できる。76次調査では築地塀遺構、94次調査では寺域の区画溝が出ており、「古図」に描かれた聖福寺の姿を劈頭とさせる。さらに、現在の聖福寺境内には9つの塔頭が残るが、往時は38つもあったという。120次調査B区は塔頭繼光庵の推定地で、礎石建物や粘土の整地層群が出ており、この寺院に伴う可能性がある。また、74次・84次調査でも礎石を伴う掘立柱建物を検出し、塔頭・子院跡が想定できる。

以上から、「聖福寺古図」や既往の調査成果をふまえれば、本調査区は広義の聖福寺寺域（寺中町）の内外を画する築地塀の推定ラインにあたる。

表1 聖福寺周辺の調査地点と関連する内容

次数	所在地	特記事項	砂丘面（m）	報告集番号
1	御供所町150-1	14Cの6号溝で大量の馬骨。14C半ば以降の道路遺構。		543
8	御供所町150-1	16C代の土間状遺構は茶室か。		543
11	御供所町3-30	確認調査。		
30	御供所町	48次の300号溝の延長は未検出。	3.1	149
48	御供所町40外	聖福寺創建当時の門前道路側溝か（300号溝）。	3.0～3.5	282
71	御供所町235-1ほか	包含層で緑色ガラス付白磁、SK438でガラス坩堝。		450
74	上呉服町131-2	聖福寺寺中町。道路遺構。礎石を伴う掘立柱建物は塔頭跡か。	2.9～3.0	395

76	上貝塚町596ほか	SG354は築地壠造構の可能性あり。	-0.5	332
84	上貝塚町119・133・123	聖福寺寺中町。道路、粘土の整地と礎盤。礎石を作う建物は塔頭跡か。	3.3	521
94	御供所町11-10	旧塔頭順心庵。「古図」にある寺域を示す溝。		593
102	上貝塚町		埋立土	706
106	御供所町5-20	カクランで遺構の残存が良くなく、性格不明。		593
107	上貝塚町	12C前半の經筒の埋納。溝に遺体。	2.8 ~ 2.9	706
120A	上貝塚町	粘土による整地。寺院跡地か。	埋立土	706
120B	上貝塚町	塔頭鐵光庵推定地。砂丘上に粘質土で整地。瓦使用の礎石建物跡。	埋立土	706
130	御供所町3-17	溝SD004は基幹道路に直交。	3.4	762
140	上貝塚町161-4	聖福寺寺中町。寺院周連造構・遺物なし。	3.2	808
145	御供所町313-2	聖福寺寺中町。調査区北半部は屋敷内の庭空間か。	2.7 ~ 3.1	851
177	御供所町173,155-11番	近世大溝SD03で発治津・剥口片。		年報22
190	御供所町6	現在の聖福寺境内。明瞭な地業面なし。	3.7 ~ 3.9	1126
199	御供所町	「橋」文丸瓦瓦当・鬼板瓦出土。広東系白磁、景德鎮、磁州窯系の陶器の廢棄土坑。		1289
215	上貝塚町126,127,128	太閤町割り以前の溝。	3.1	1371
217	御供所町264,265,266	メインストリートの道路側溝 (SD19)。	3.1 ~ 3.7	本書

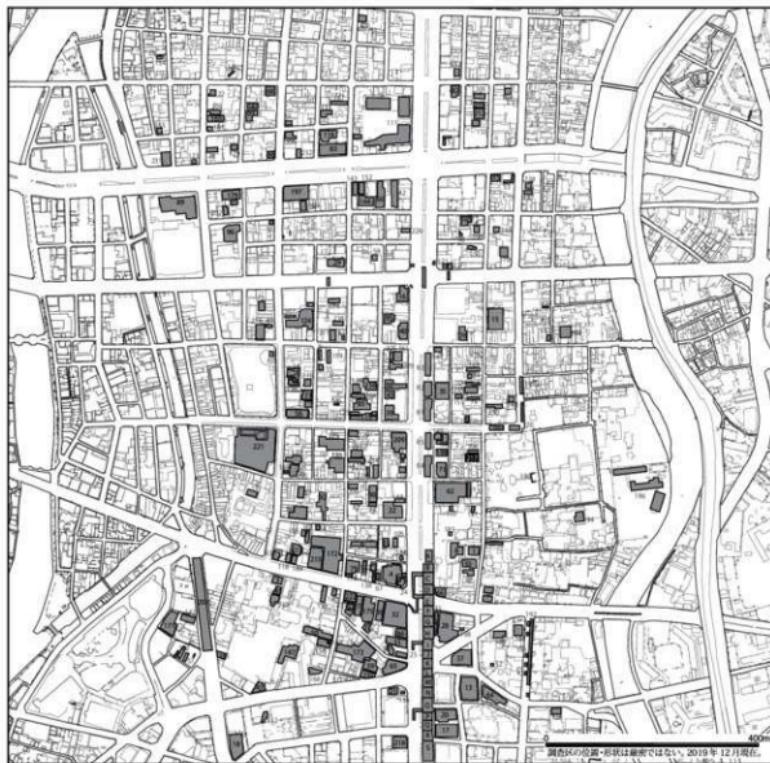


図1 博多遺跡群発掘調査地点

III 発掘調査の記録

1. 調査の経過と概要

第217次調査地点は博多遺跡群の中央東寄りにあり、調査区の現状は駐車場であった。確認調査では、現地表面（標高5.7m）から1.5mほど掘り下げた灰褐色砂層で遺構が見つかった。これに基づき調査着手前に近代から現代までの整地層（現地表面下1.5～1.7m）を重機で掘削して場外に搬出した。土留めは地中連続壁方式を採用したが、安全を考慮し調査区壁面から1m引きをとった。発掘作業は、調査区南西側をI区、北東側をII区に分割し、I区→II区の順に反転しておこなった。平成29年11月27日からI区第1面の遺構検出を始め、以降、II区第2面まで人力で掘削した。I区第2面掘削終了後には、排土を場外搬出した。平成30年3月12日に全作業を終了し、翌13日に機材を撤収した。

調査では中世を主体とする溝、井戸、多数の土坑・柱穴を検出した。周辺の調査では弥生時代から古代の遺構が見つかっているが、本調査区では未検出である。ただし、当該期の遺物は出ているため、削平されたと考える。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、貿易陶磁器、国産陶器、銅錢、動物遺存体、金属製品がコンテナケース50箱分、鉄滓がコンテナケース60箱分出ている。

2. 基本層序（図3）

調査区は北東方向にかけて褐色砂の基盤層が緩やかに上昇する。最も低い調査区南西端で標高3.1m、最も高い調査区北東側で標高3.8mを測る。表土鋤取りの段階で、すでにII区の一部で褐色砂が出ており、遺構面の面数は試掘調査時の計画より少なくなることが予想された。

第1面は、試掘調査の成果から標高4.2m前後の暗灰褐色粘質砂層面上、第2面は標高3.1～3.8mで検出した博多遺跡群の基盤層である褐色砂層面上に設定した。

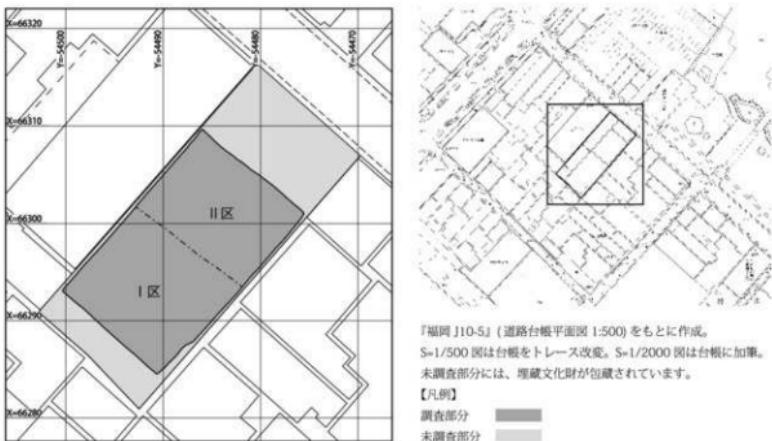
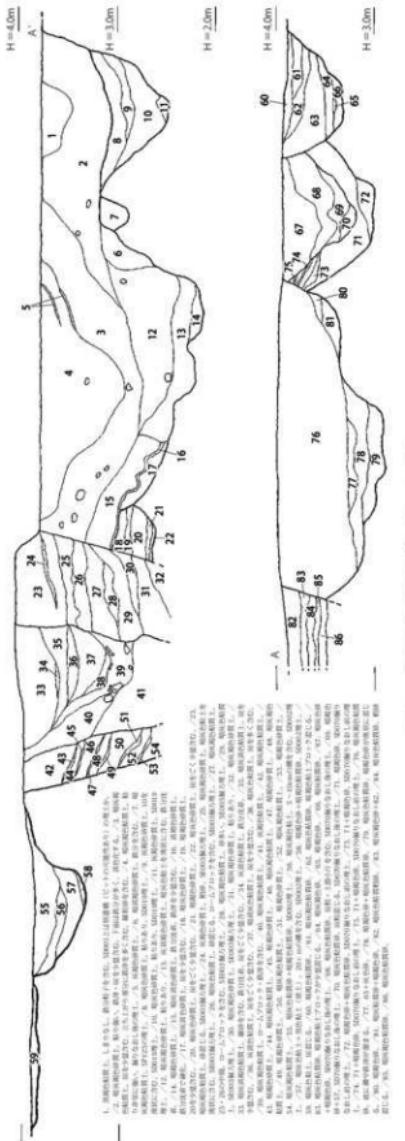


図2 第217次調査地点位置図 (S = 1/500・1/2000)



3. 各遺構面の概要

(1) 第1面の調査 (図4・Ph. 4)

標高4.0m付近で検出した暗灰褐色粘質砂層上で設定した遺構面である。II区では、すでに第2面設定の褐色砂層面が露出した部分もあり、I区の遺構が主体である。遺構面の時期は概ね14世紀以降と考える。第1面では、溝・井戸・土坑などを検出した。SD001・002は現在の街区から傾き、SD012は現在の街区と同方向を示す。現在の街区は16世紀末の太閤町割りを踏襲するので、SD001・002はそれ以前の掘削が想定できる。井戸は瓦井戸3基とSE003、SE065で、いずれも15世紀以降の掘削であろう。土坑は、土師皿・壺・陶磁器、瓦器がまとまって出たSK006～009が調査区中央付近に集中する。ゴミ捨て場だったのであろうか。調査区北西壁際の近世のカクランでは鉄津・羽口が出た。

(2) 第2面の調査 (図5・Ph. 3, 5, 13)

標高3.1～3.7mで検出した褐色砂層面上で設定した遺構面である。遺構面の時期は概ね11世紀後半以降と考える。溝、井戸、土坑、柱穴を検出した。I区はSD001下面の遺構が主体である。溝下面是鉄分が沈着し不明瞭で、検出ミスや掘り間違いがあると思われる。SK024など大きな土坑は、溝の掘り直しか。I・II区ともに柱穴を多数確認したが、検出数が多く、建物の復元には至っていない。

次節では抽出した遺構と遺物を述べる。未掲載遺構・遺物はpp.27-28の遺構一覧を参照いただきたい。

図3 調査区南東側土層図 ($S = 1/50$)

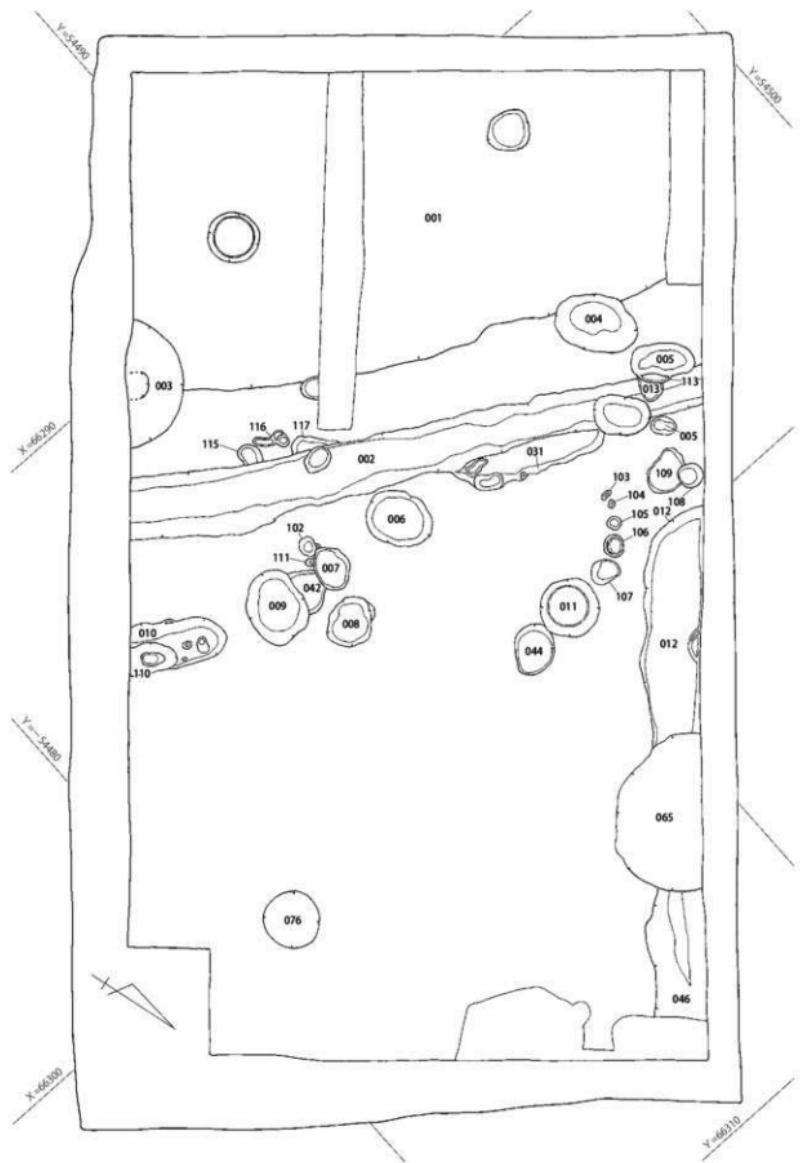


図4 調査区第1面遺構配置図 ($S = 1/100$)

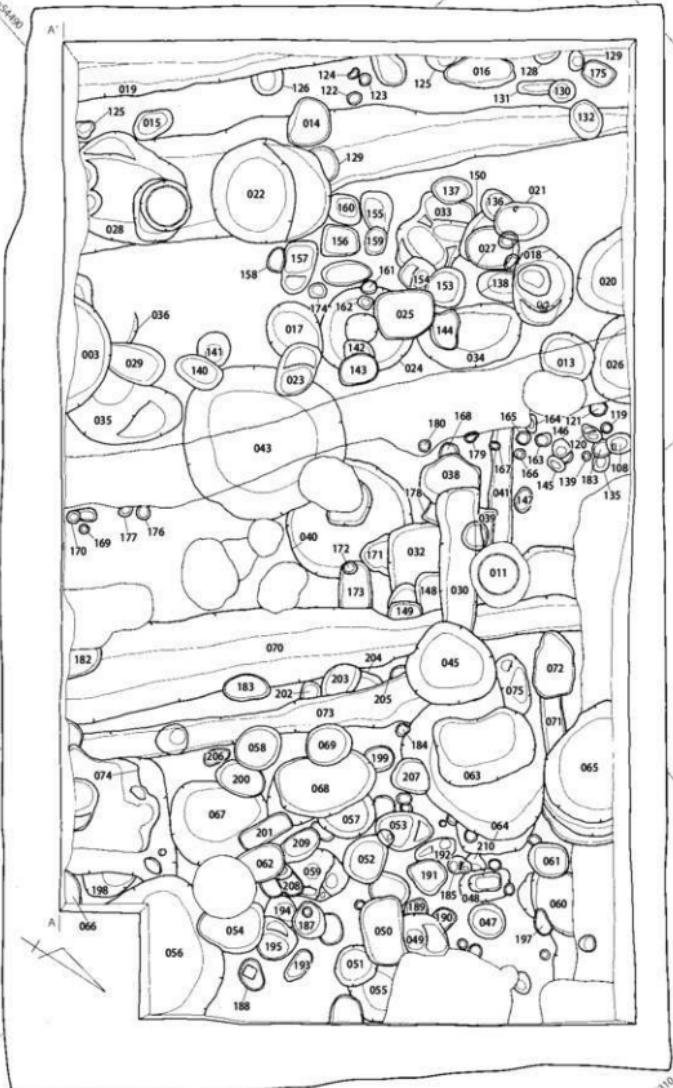


図5 調査区第2面造構配図 ($S = 1/100$)

4. 遺構と遺物

(1) 溝

本調査区の主となる遺構で、計11本検出した。とくにSD001・002・019・070・073は同方向に走る。これらは、既調査で検出した博多の「メインストリート」(大庭2009)道路側溝の延長線上で、時期も相違ないため、道路側溝か、それに関連する溝と考える。

SD001 (図6～11・Ph. 6, 7) 1区南西部第1面で検出し、幅6.2m、最深1.95mを測る。埋土は上下2層に大別でき、上層は暗灰色粘質砂、下層は鉄滓を含む灰褐色砂である。鉄滓は溝肩部に集中し、コンテナケース60箱分出た。

1～25は粘質土出土遺物。1～11は土師器皿・壺で底部糸切。2は口縁端部とみこみにススが付く。燈明皿。3・6は回転ナデ後、みこみ部分に静止ナデを施す。12～14は朝鮮陶器。12は雜釉陶器碗で、口縁端部にスス付着。みこみ・底部に砂目跡あり。13・14は粉青沙器碗。15は白磁水注。16～18は龍泉窯系青磁。16は三脚香炉。17は椀I-6類。19は天目碗。20は瓦玉。21は石製硯で、石質はきめ細かく、暗灰色で一部赤褐色をなす。破面に擦痕平坦面があり、砥石に転用か。海部に墨付着。22は坩堝で内面に緑青が付く。23は押波状文軒平瓦(Ph.24)。24は土師質土器鍋で内外面にススが付く。25はガラス玉。26～58は砂質土出土遺物。26～41は土師器皿・壺。41は底部ヘラ切でほかは底部糸切。31は口縁端部にススが付く。燈明皿。26・40は回転ナデ後、みこみ部分に静止ナデを施す。26は口縁端部打ち欠き。42は土師質土器擂鉢で注口内面にスス付着。43は土師器椀で、回転ナデ後ミガキを施す。44は瓦器椀。45は瀬戸鉢。46は染付蓮子碗。47・48は天目碗。49は白磁皿VII-IIa類。50・52・54・55は朝鮮陶磁器。50は高麗象嵌青磁碗。52・54・55は粉青沙器碗。51・53は龍泉窯系青磁。56は象嵌青磁碗。暗オーリーブ色で、内面文様部に焼膨れあり。57・58は滑石製品。57は石鍋で外面にスス付着。58は擂鉢か。59～135は砂質・粘質土いずれも含む。59～98は土師器皿・壺。98は底部ヘラ切でほかは底部糸切。64・91は口縁端部とみこみ、59・61・73は口縁端部、67は外側、83は内外面にススが付く。燈明皿。73・81・91・95は回転ナデ後、みこみ部分に静止ナデを施す。67・68・73・91は口縁端部打ち欠き。70・86・91・97は底部に板状痕あり。99は備前擂鉢。100は瓦質土器蓋。回転ナデ成形し、表面ヨコハケ後回転ハケ。つまみは回転ナデで接合し、表面ユビオサエ。101は土師質移動式竈の器受け部。下部は被熱で赤化する。102は青磁。103・109は青白磁。109は厚い釉を施す。104は瀬戸鉢。105は白磁。106は青磁碗で、みこみに砂粒、高台に別個体が釉着。107・108は天目碗。110は白磁碗で、椀IV-1a類。113は椀V-4b類で、底部の墨書は花押か(Ph.20)。111・112・114・116・117は中国産染付碗・皿。115は龍泉窯系青磁碗。118・119は朝鮮産陶器。118は雜釉、119は粉青沙器刷毛目碗。120は弥生土器甕。121は輪羽口。送風口はガラス質化する。122～124は坩堝。胎土に径1～3mmの白色砂粒、糊をやや多く含む。122・124は内面に緑青、123は銀粒子が付く。125・126は滑石製品。125は温石、126は石鍋で、いずれも外面にスス付着。127はガラス玉。128は鉛製で使途不明。129は黒色轡石。130は赤間石製硯で、海・文様部に墨が付く。131は瓦玉。132は三巴文軒丸瓦。133・134は宝珠文軒平瓦。134は外側2次焼成痕跡あり(Ph.22)。135は砂岩製砥石。以上から、時期は15世紀以降と考える。

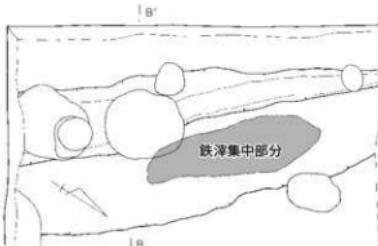


図6 SD001遺構実測図 (S = 1 / 150)

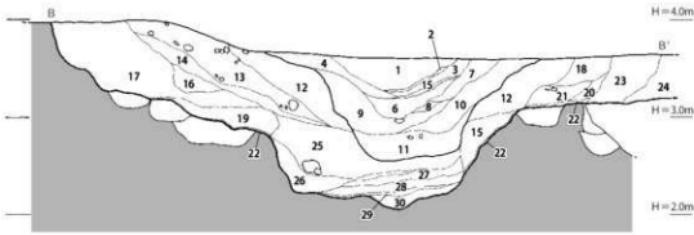


図7 S D001土層図 ($S = 1/50$)

1. 暗灰褐色粘質土、斑を多く含む。／2. 黄褐色砂質土、粒りあり。／3. 暗灰褐色質土、粒りあり。／4. 暗灰褐色質土、3-6号季墳含む。／6. 黄褐色砂質土、少少含む。斑を多く含む。／7. 黄褐色砂質土、少少含む。／8. 黄褐色砂質土、少少含む。／9. 黄褐色砂質土、少少含む。／10. 黄褐色砂質土、少少含む。／11. 黄褐色砂質土、少少含む。／12. 黄褐色砂質土、少少含む。／13. 黄褐色砂質土、少少含む。／14. 黄褐色砂質土、斑含む。／15. 黄褐色砂質土、SD001当時の理屈。／16. 黑褐色砂質土、斑分離含む。／17. 暗灰褐色砂質土、斑含む。／18. 暗灰褐色砂質土、斑含む。／19. 黄褐色砂質土、斑洋多く含む。SD001で斑多く含む。／20. 黄褐色砂質土、斑洋。／21. 暗灰褐色砂質土、斑含む。／22. 黄褐色砂質土、斑含む。／23. 黄褐色砂質土、斑洋多く含む。斑を少少含む。／24. 黄褐色砂質土、斑洋。斑を少少含む。／25. 黄褐色砂質土、斑を少少含む。斑洋を含む。／26. 黄褐色砂質土、斑を少少含む。／27. 暗灰褐色砂質土、斑を少少含む。／28. 黄褐色砂質土、斑分離。／29. 黄褐色砂質土、斑色粘土が縦に入る。

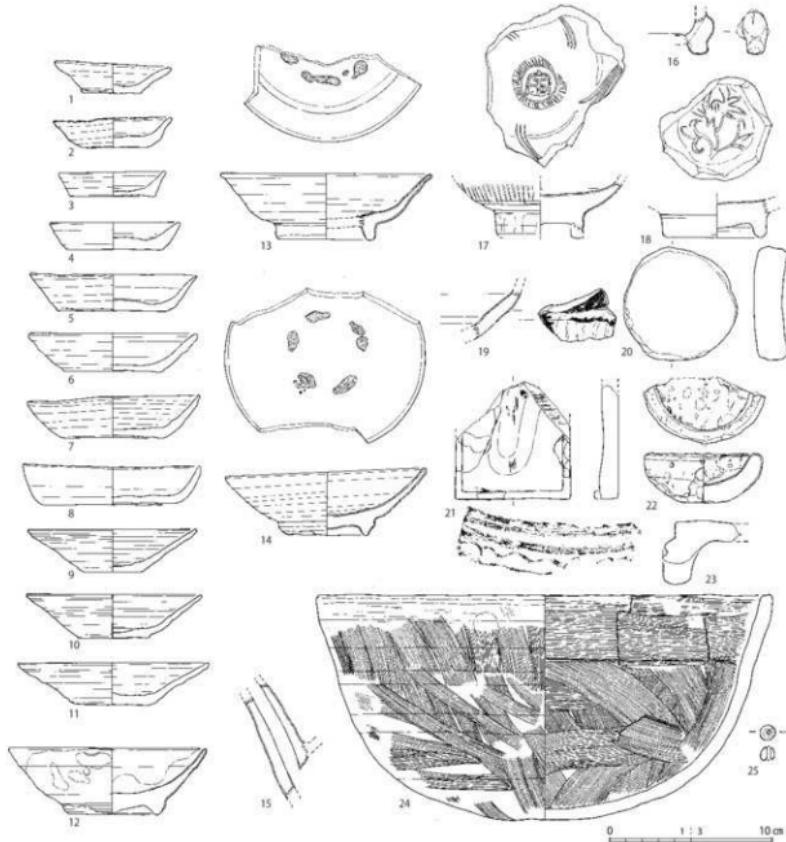


図8 S D001粘質土出土物実測図 ($S = 1/3 \cdot 25はS = 1/1$)

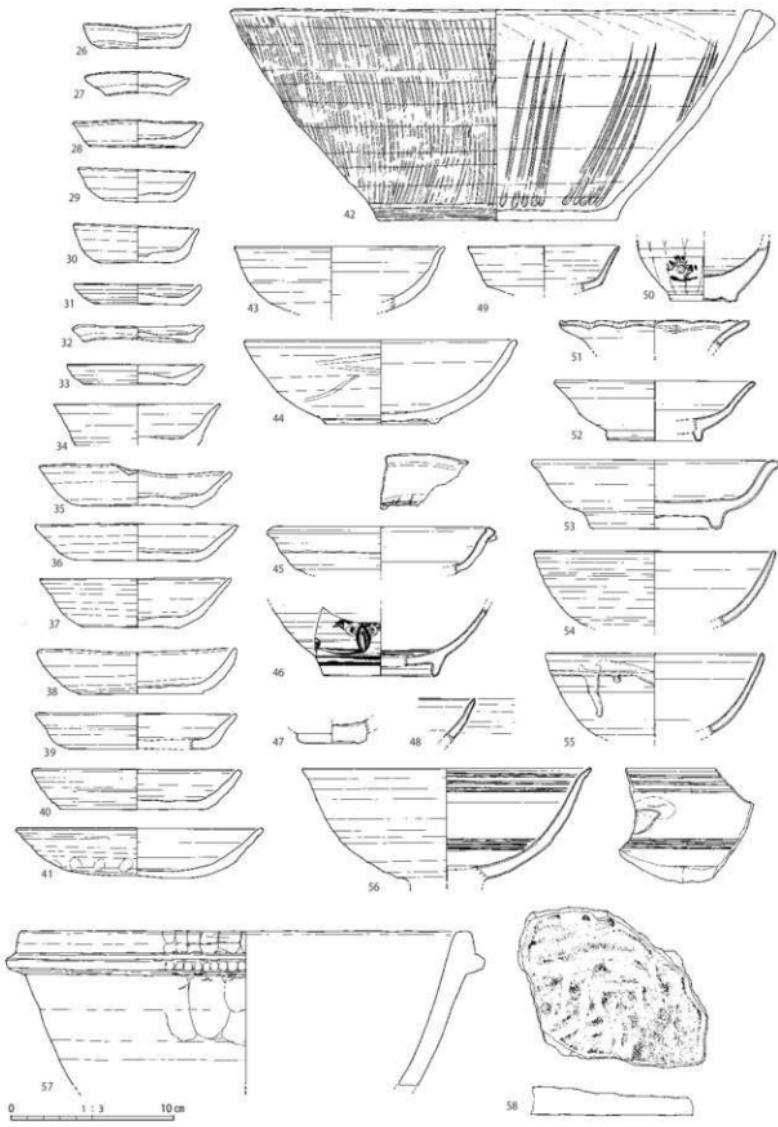


図9 S D001砂質土出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

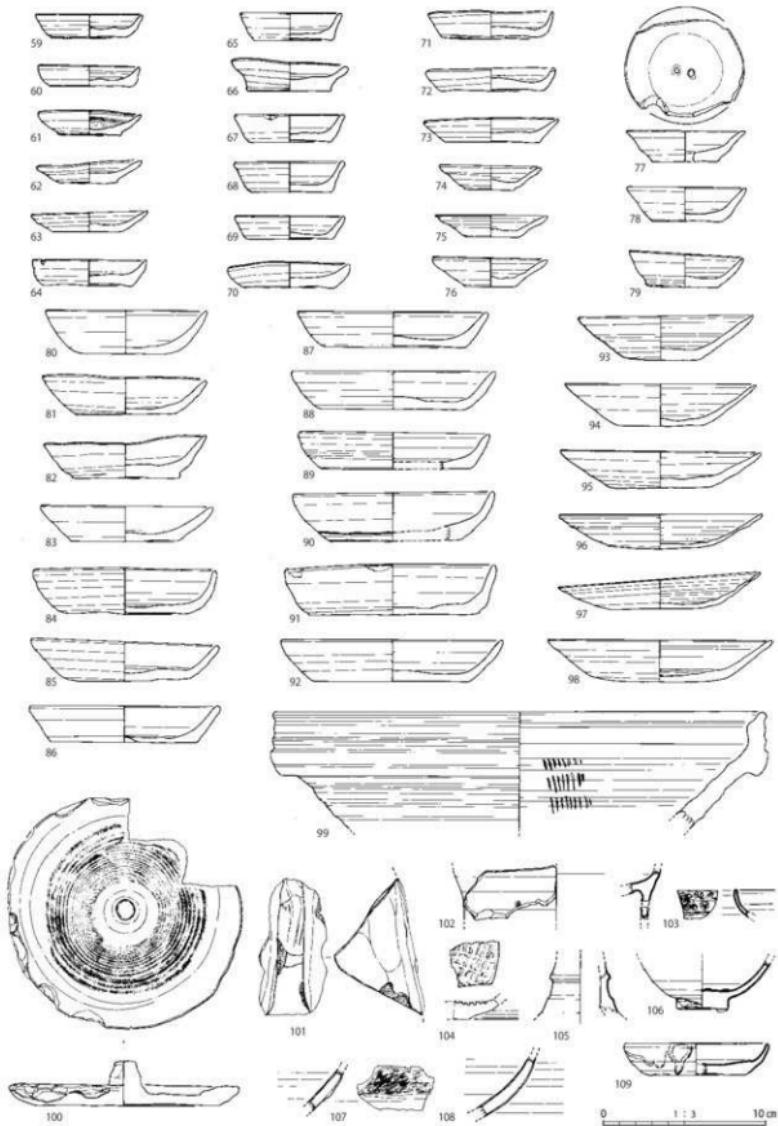


図10 SD001出土遺物実測図(1) ($S = 1/3$)

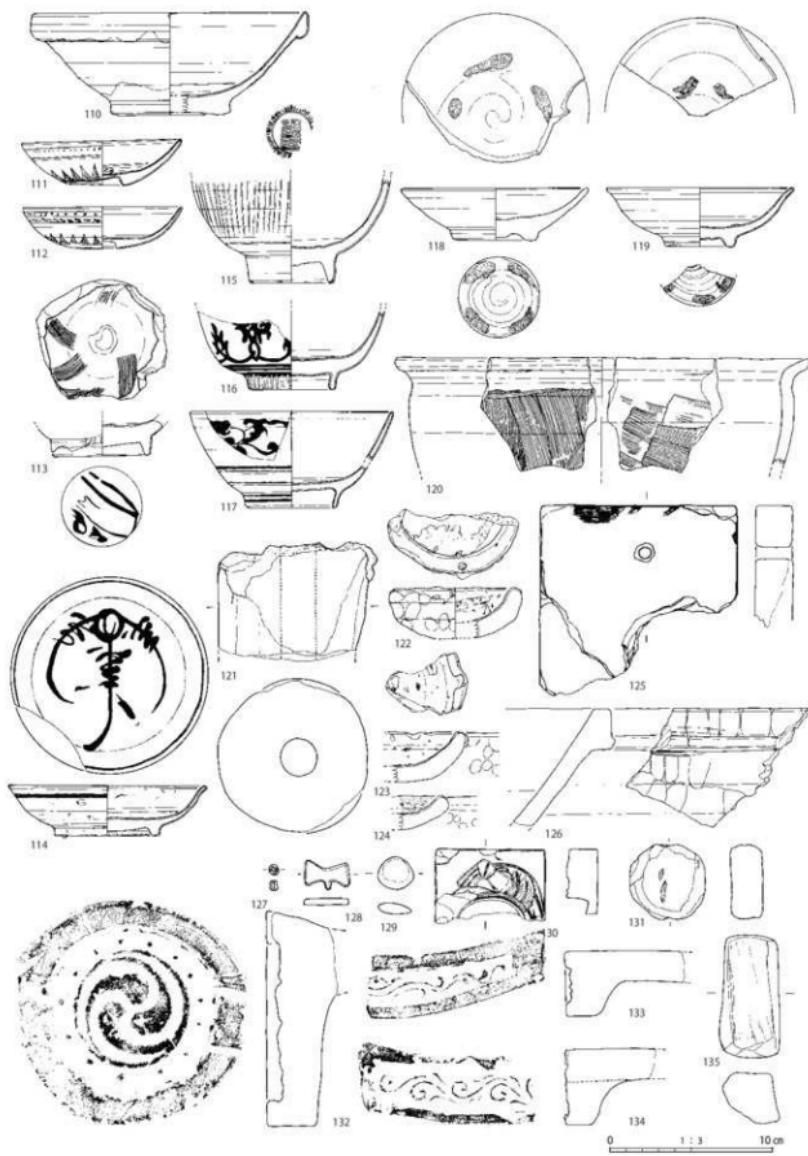


図11 S D001出土遺物実測図（2）（S = 1/3・127はS = 1/1）

SD002 (図12、13・Ph. 8、9) SD001の北東側、I区1面で検出した。埋土は、上層は灰色粘土と明褐色砂の互層、下層は暗褐色砂が堆積する。136～143は上層出土。136・137は土師器環で、底部糸切。138～141は白磁。138は皿V-2a類。139は椀V類。141は皿VI-1類で、外面に厚い釉垂れあり。142は青白磁香炉。143は陶製球。表面に接合痕がある。144は下層出土の土師器皿。底部ヘラ切。145～159は上下層いずれの遺物も含む。145～148は土師器環・皿で底部糸切。149は白磁口禿げ皿で、皿IX-1a類。底部は板状工具で釉薬を伸ばす。150～152は龍泉窯系青磁碗。150は椀I-1a類。151・152は椀II類。153は青磁碗。胎土は径1mmの白色砂粒を含む。砂粒が器表面に見えて見栄えがよくない。みこみに目跡の粘土が軸着。154は青白磁碗。155は土師質土器甕。156は弥生土器甕の底部。157は瀬戸卸皿。卸部に釉がかかる。158は滑石製石鍋。内面調整は不明瞭。159は須恵質土器。以上から、時期は13～14世紀代と考える。

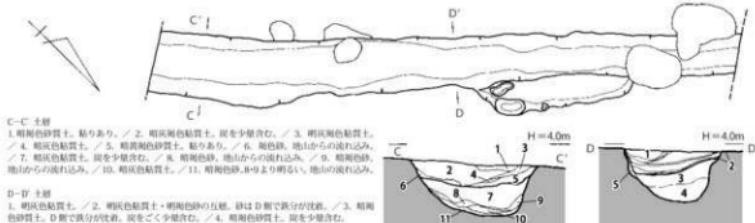


図12 SD002遺構実測図 (S=1/100)・土層図 (S=1/50)

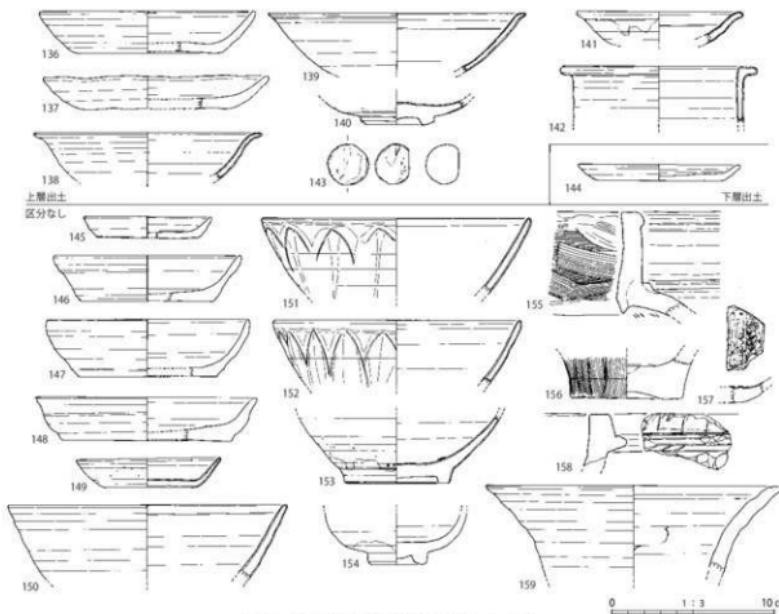


図13 SD002出土遺物実測図 (S=1/3)

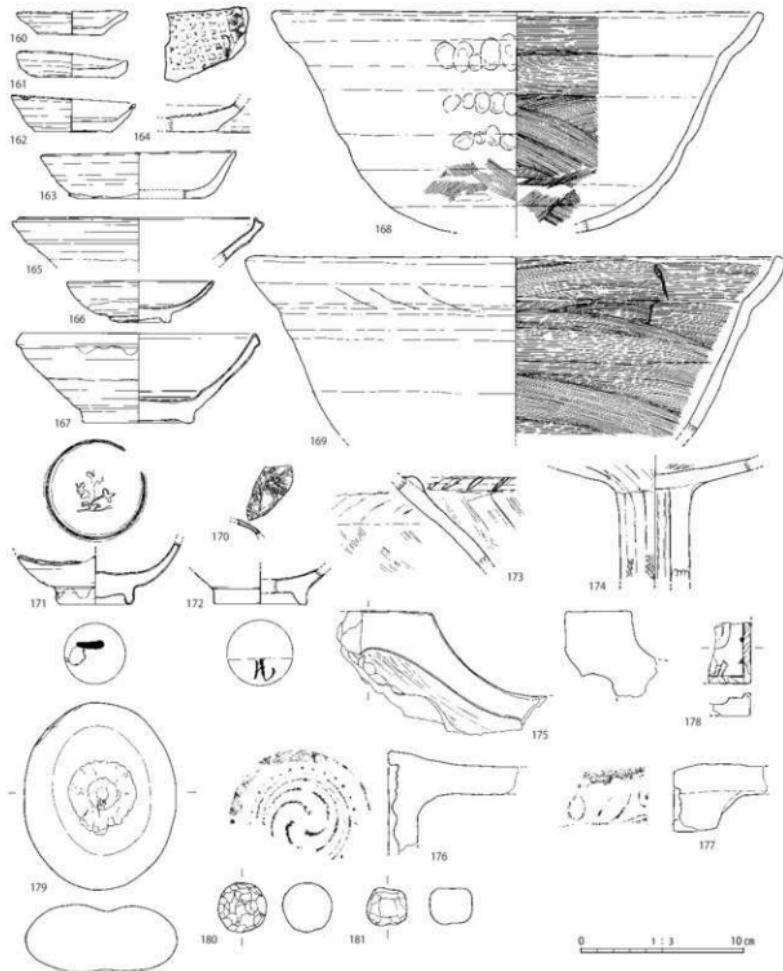


図14 SD012出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

SD012 (図14・Ph.1) 調査区北西壁際、1面で検出し、検出面からの深さ0.9m（底面標高3～3.2m）を測る。埋土は上層が暗灰褐色粘質砂、下層が暗褐色砂である。拳大のレキを多く含む。現在の街区に合う。SD012北東で検出したSD046と埋土・規模が同じであるため、同一の溝とした。160～163は土師器皿・皿。すべて底部糸切。160は回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。162は口縁部にススがつく。164・165は瀬戸卸皿。164は卸部に施釉。166・167・172は白磁。166は皿VII-2a類、167は椀IV-1b類。172は底部に墨書、花押か(Ph.18)。168・169は土師質土器鍋で外面にスス付着。170は黄褐釉陶器合子蓋。

171は龍泉窯系青磁碗で、底部まで釉が垂れる。墨書「一」(Ph.17)。173は壺の頸部。外面一部に黒斑あり。外面暗褐色、内面明褐色で、胎土は径1～3mm程の白色砂粒をやや多く含む。174は高环脚部。表面摩滅で調整不明瞭。175～177は瓦。175は鬼瓦。暗灰色で、胎土は径1mmの白色砂粒をごく少量含む。176は三巴文軒丸瓦。灰白色。177は蓮華文軒平瓦。径1～3mmの白・黄色砂粒をやや多く含む(Ph.23)。178は硯。砂岩質で、墨が付く。179は凹石。180・181は砂岩質の石球。表面叩打で整形する。遺構の切合関係と遺物から、時期は14世紀以降を想定する。

SD019 (図15・Ph.10, 12) 調査区南西壁際で検出し、底面標高2.5m前後を測る。SD001に切られる。埋土は暗灰褐色粘質砂を主体とし、炭粒が少量混じる。下層は粘質土と砂の互層である。182～186は土師器環・皿で、すべて底部糸切。183・185は回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。186は底部に板状痕あり。187は瓦質土器片口鉢。188・189は白磁。188は楕V-4類で内面に砂粒釉着。189は燭台で、筒先端部にススが付く。底部は自重でゆがむ(Ph.21)。190～193は龍泉窯系青磁。190・192は碗で、190は内面に砂粒が釉着。191・193は壺で、191は壺III-5b類か。194は須恵器環B。遺構の切合関係と遺物から、時期は上限を12世紀後半、下限を15世紀と考える。



Ph. 1 SD012 完掘状況（北東から）

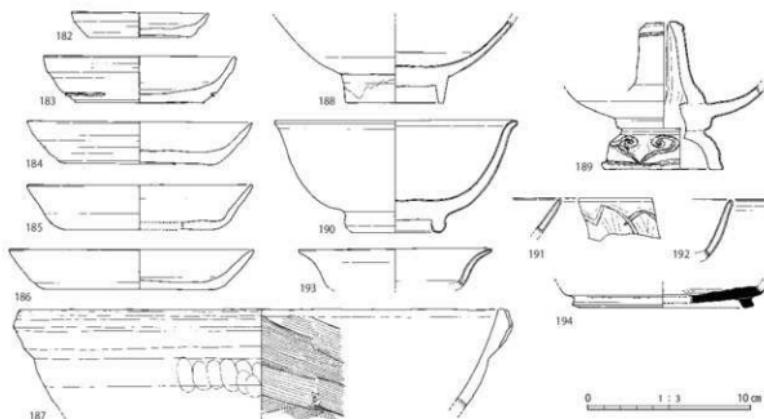
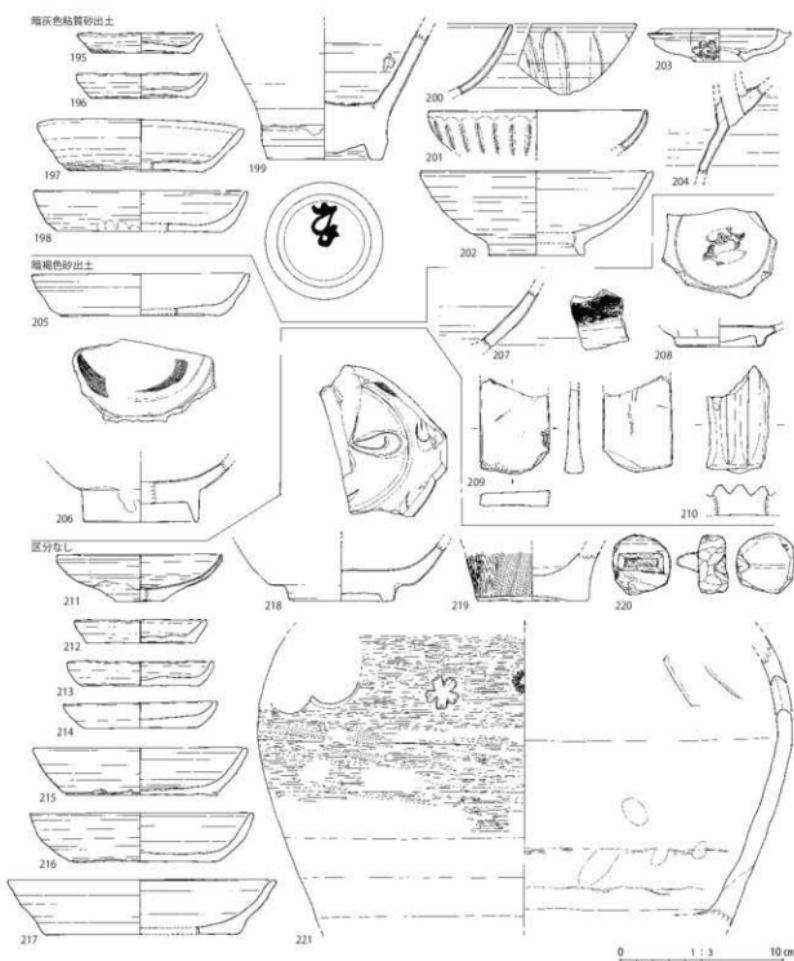
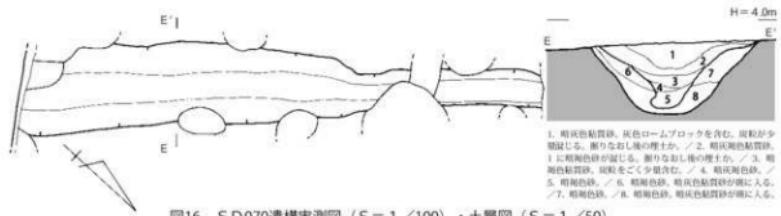


図15 SD019出土遺物実測図 (S=1/3)



SD070 (図16、17・Ph.11) II区2面南西側検出、最大幅1.48m、最深0.7m（底面標高3～3.4m）を測る。土層から、暗褐色砂堆積後に中央部のみ断面V字状に掘り直し、暗灰色粘質砂が堆積したと考える。195～204は暗灰色粘質砂出土。195～198は土師器皿・壺で、すべて底部糸切。196は回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。底部に板状痕あり。

199は白磁壺。粘土切削物や砂粒が内面に軸着。底部に花押の墨書きあり（Ph.15）。200・201は龍泉窯系青磁。200は壺、201は壺-IIIb類。202は楕葉形瓦器壺。回転ナデ後ミガキ。203は青白磁合子。204は褐釉陶器水注。205～210は暗褐色砂出土。205は土師器壺で底部糸切。206は白磁壺V類。207は天目碗。208は龍泉窯系青磁壺IV類。209は砥石。石質はち密できめ細かい。黄緑・黄灰色。210は瓦か。平坦部と文様部2枚の粘土を接合する。211～221は暗灰色粘砂・暗褐色砂出土いずれの遺物も含む。211は白磁壺VI-1a類。212～217は土師器皿・壺で、すべて底部糸切。218は龍泉窯系青磁壺I-2a類。219は弥生土器甕の底部。220は滑石製鍋転用品。石鍋の口縁が一部残る。221は瓦質土器風炉。以上、一部古い様相の遺物も含むが、主な時期は13～14世紀と考える。

SD073 (図18) II区2面、SD70の南西側で検出し、幅0.7m、最深0.2m（底面標高3.5m前後）を測る。埋土は暗灰褐色粘質土。222～224は土師器皿。すべて底部糸切。223・224は回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。225は瓦器壺。226は龍泉窯系青磁浅形碗。227は土師質土器擂鉢。底部内外面にススが付く。遺物から、時期は14世紀後半～15世紀代と考える。

(2) 井戸

計7基検出し、江戸時代以降を除く3基を報告する。

SE003 (図19) I区1面検出、掘方径2.9mを測る。検出時から井戸枠と掘方が明確で、当初から井戸と認識できた。調査区壁面崩落の危険性を考慮し未完掘である。228～232は土師器皿・壺。すべて底部糸切。228・229は回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。233は染付模符底皿。234は胴部片で磁州窯か。235は宝珠文軒平瓦。未図化資料のうち、井戸枠内出土遺物は近世陶磁器も多く含む。SD001を切るために、15世紀以降に掘削し、その後近世まで使用したと考える。

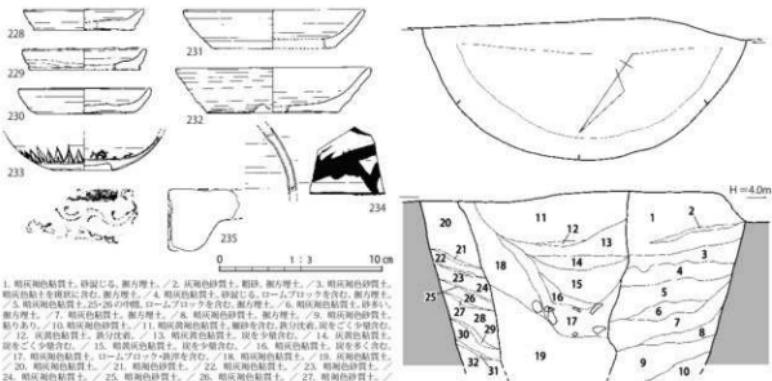


図19 SE003構造実測図・土層図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

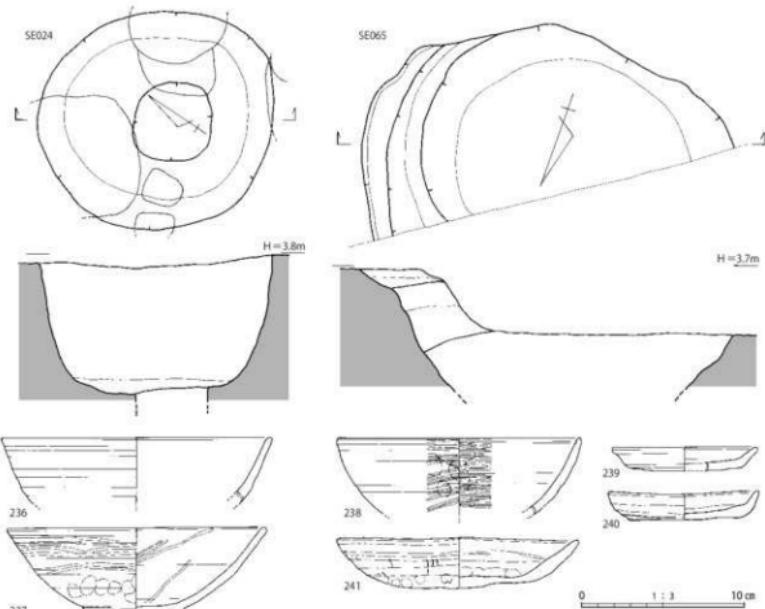


図20 SE024・SE065造構実測図 ($S=1/40$)・出土遺物実測図 ($S=1/3$)

SE024 (図20) I区2面検出、掘方径1.9m、井戸枠径0.6mを測る。SD001ほか複数の上面遺構に切られるため、井戸と認識せず掘方平坦面まで掘削した。よって井戸枠、掘方の遺物が混ざっている。掘方埋土は暗褐色砂質土。236は土師器椀。回転ナデ後、ミガキ。237は瓦器椀。みこみに重ね焼き痕あり。SD001、SK025に切られるため、14世紀後半以前を想定する。

SE065 (図20) II区1面検出、掘方長径2.9mを測る。井戸枠は未確認である。埋土は暗褐色砂質土で、黒褐色砂を斑状に含む。238は楠葉・大和系瓦器椀。239～241は土師器皿・壺。239は底部ヘラ切。240は底部糸切。241は底部ヘラ切で、回転ナデ後一部ユビオサエ。底部外面に爪痕が残る。遺物は細片が多く、時期を判断しにくい。SD012を切るために、14世紀以降の掘削と考える。調査区壁面崩落の危険性を考慮し、未完掘である。

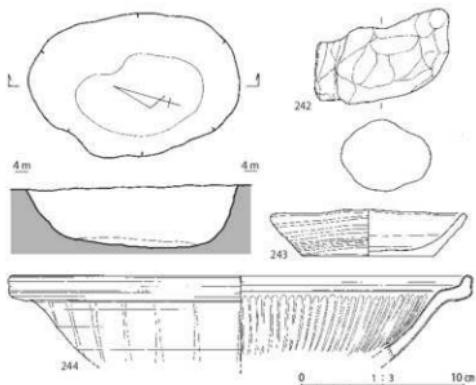


図21 SK004造構実測図 ($S=1/40$)・出土遺物実測図 ($S=1/3$)

(3) 土坑

SK004(図21) I区1面検出で、長軸長1.72m、最大幅1.18m、最深0.5mを測る。埋土は暗灰黄色砂質土。西側の壁立ち上がりが不明瞭であった。242は土師器瓶把手。焼成不良。243は土師器環で、底部糸切。244は青磁皿。SD001を切るために、時期は15世紀以降と考える。

SK006(図22) I区1面検出で、長軸長1.38m、最大幅1.1m、最深1.5mを測る。埋土は暗褐色砂質土。口径8cm・12cm前後の土師器環・皿がまとめて出た。245～267は土師器皿・环。249はみこみ部分のみ灰色をなす。灯明皿か。254は自重でゆがむ。255は成形時の粘土板接合痕が確認できる。256は底部に板状痕あり。259は回転ナデ後、見込み部分静止ナデ。底部に板状痕あり。266はみこみにスス付着。267は底部ヘラ切。268は土師質土器鍋。口縁内面に4cm間隔で三巴文印を押す。269は龍泉窯系青磁碗II-b類。270は青白磁で花器の脚部か。271は龍泉窯系青磁碗。口縁端部は釉をかきとる。外面は厚い釉垂れ。272は滑石製石鍋転用温石。孔付近に組ずれ痕あり。長側面はケズリ調整。底部はスス付着。以上から、時期は14世紀後半～15世紀前半で、14世紀後半を主体とする。なお、混入資料で貨舟が1枚出ている(Ph.28)。

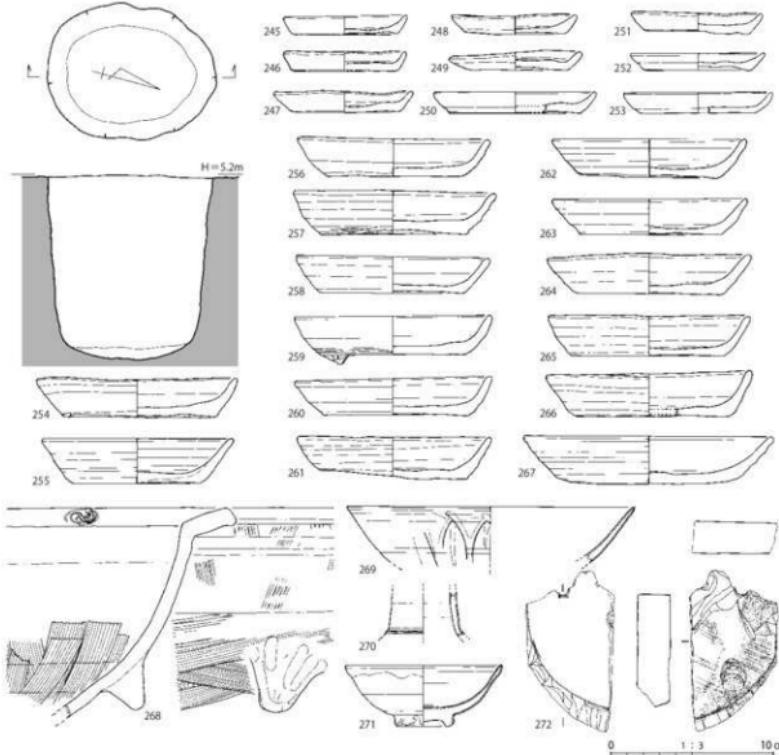


図22 SK006遺構実測図(S=1/40)・出土遺物実測図(S=1/3)

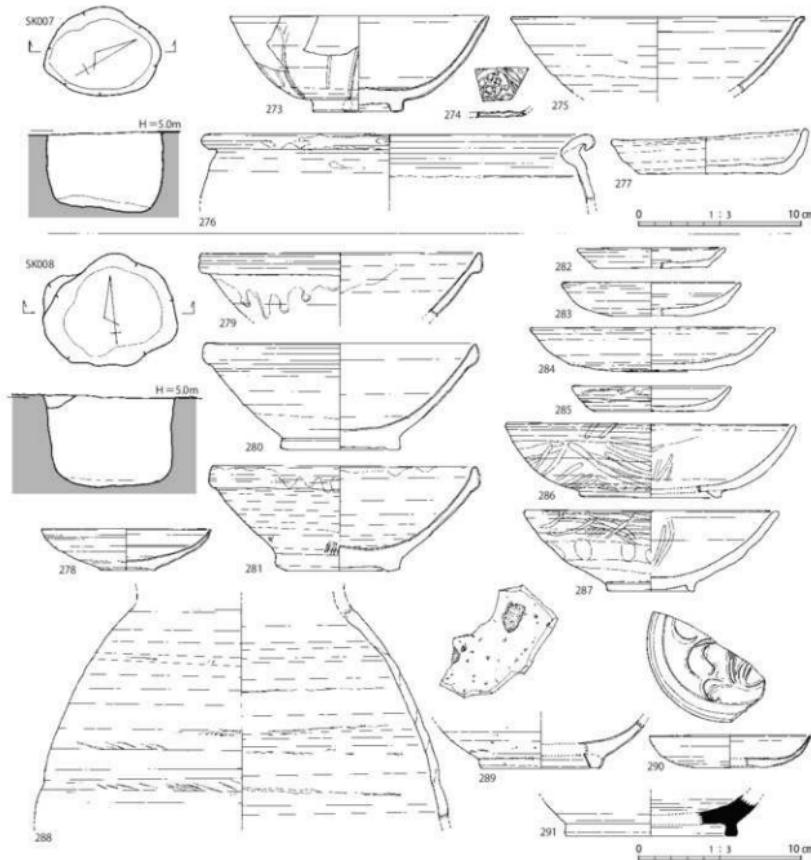


図23 SK007・SK008遺構実測図 ($S = 1/40$)・出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

SK007 (図23) I区1面検出で、長軸長0.96m、最大幅0.74m、最深0.66mを測る。273は龍泉窯系青磁碗IV類。みこみに爪痕が残る。274は白磁皿X-b類。内外面に施釉。275は青白磁碗。276は備前甕。277は土師器坏。底部糸切で体部は回転ナデ後、みこみに強い静止ナデを施す。以上から13世紀後半～14世紀前半と考える。

SK008 (図23) I区1面検出で、長軸長1.08m、最大幅0.92m、最深0.74mを測る。黒色土と黄褐色砂が互層となりレンズ状堆積する。278は白磁皿VII-1a類。釉薬は白黄色。279～281は白磁碗。280・281は碗IV-1b類。279・281は厚い施釉を施す。280は胴部外面露胎部に工具痕あり。282・284は土師器皿・坏。底部ヘラ切。284は回転ナデ後、底部外面回転ヘラ切。内面はコテアテ後ミガキ。283・285～287は瓦器。283・285は皿。283はミガキ不明瞭。286・287は碗。内面ミガキ不明瞭。288は高麗陶器盤口甕。内外面青灰色で、胎土は茶褐色。焼成堅緻。289は朝鮮陶器碗。290は白磁皿VII-1b類。291は須恵器坏。時期は12世紀前半以降と考える。

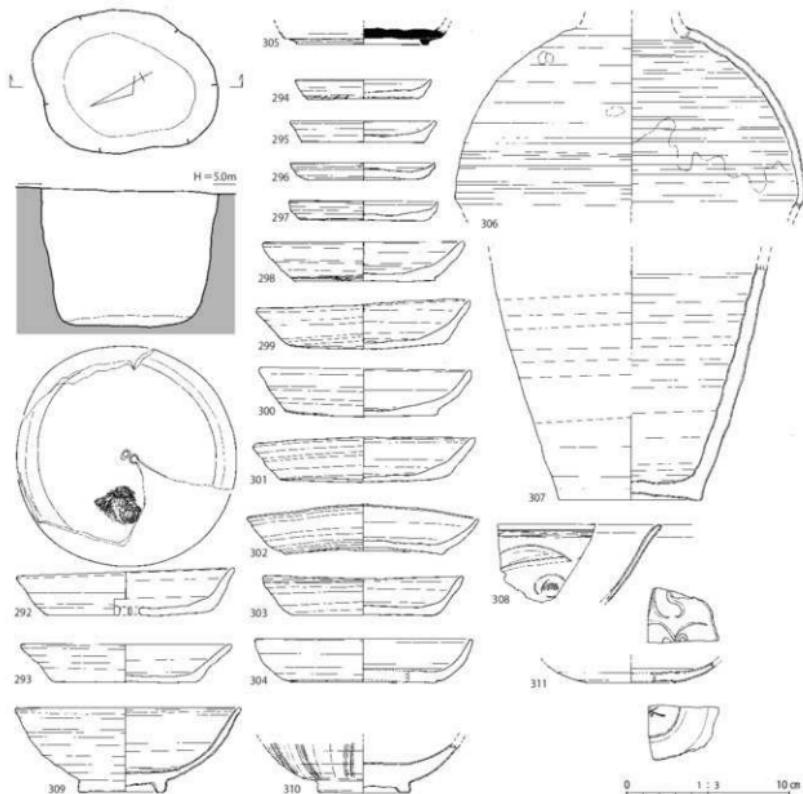


図24 SK009遺構実測図 ($S = 1/40$)・出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

SK009 (図24) I区1面検出で、長軸長1.46m、最大幅1.16m、最深1.1mを測る。292～304は土師器皿・壺。

297・301は底部ヘラ切で、ほかは底部糸切。292はみこみ中央2か所穿孔あり、スヌ付着。

293・294・298・299・300・301・302は回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。294は強く、298・299・300・301・302は弱い静止ナデ。

300はみこみにスヌ付着。294・295・299・302は底部板状痕あり。305は須恵器壺B。

306は白磁瓶、外面の釉に指痕あり。307は褐釉壺。内外面すべてに施釉。308は龍泉窯系青磁碗III-1b類。

309は白磁碗IX-1類。口禿げ。310は青磁碗。311は白磁皿VII類。破面はローリングを受け丸みを帯びる(Ph.19)。

以上、遺物の時期に幅はあるが、主体は13～14世紀である。

SK021 (図25) I区2面、SD001下面で検出し、長軸長1.1m、最大幅0.82m、最深0.66mを測る。

埋土は黒色シルト混じり砂質土で、炭粒を多く含む。

312・313は瓦器皿。内外面にミガキを施す。底部ヘラ切。

314・315は土師器皿・壺。314は底部ヘラ切。回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。

316は白磁碗IV-1a類。時期は11世紀後半～12世紀前半と考える。

SK025 (図27) I区2面、SD001下面で検出し、長軸長1.26m、最大幅1.04m、最深0.62mを測る。埋土は黒色シルト混じり砂質土で炭粒を多く含む。321～323は龍泉窯系青磁碗で、321・323は楕II-b類、322は楕III-2c類。324は備前甌。325は赤焼の須恵器環H身で、陶邑編年MT85～TK43型式期段階。326は須恵器蓋。327～342は土師器皿・坏。すべて底部糸切で、桶瀬分類環B 3b類主体である。327・330・340は回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。時期は14世紀前半と考える。

SK058 (図26) II区2面で検出し、長軸長1.02m、最大幅0.9m、最深0.28mを測る。埋土はシルト混じりの黒褐色砂で焼土を含む。317～319は土師器皿。317は回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。318・319は底部ヘラ切。320は白磁楕VI-1b類。このほか底部糸切の土師器皿、土師質土器、瓦器楕が出た。328～330など古い様相の遺物もあるが、未図化資料もふまえて、時期は14世紀後半～15世紀を想定する。

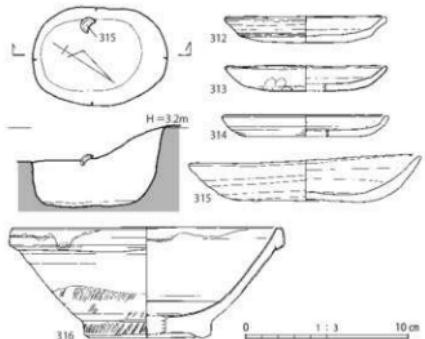


図25 SK021遺構実測図 (S=1/40)・出土物実測図 (S=1/3)

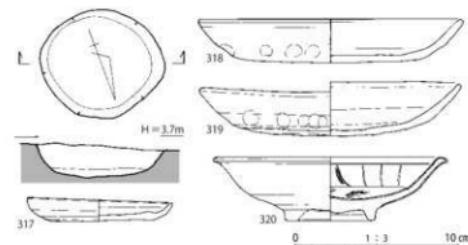


図26 SK058遺構実測図 (S=1/40)・出土物実測図 (S=1/3)

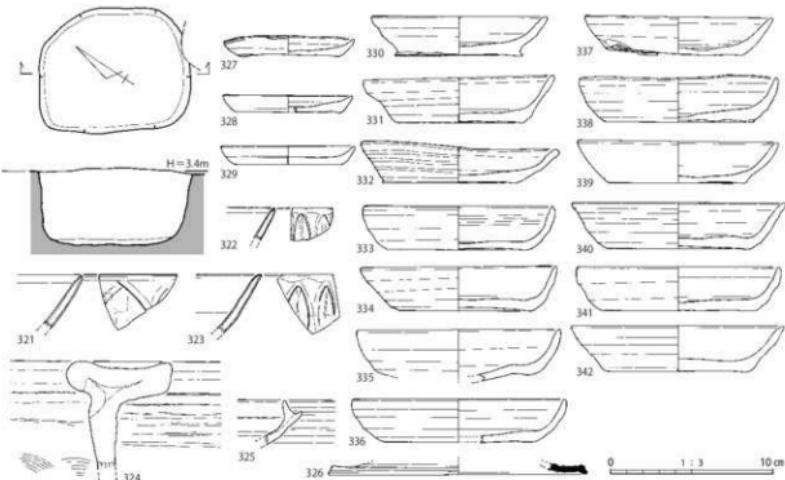


図27 SK025遺構実測図 (S=1/40)・出土物実測図 (S=1/3)

(4) その他

遺構出土遺物 (図28・29) 343～345は白磁碗。343・344は椀IV-1a類、345は椀II類。346は龍泉窯系青磁椀IIa類。347は青磁碗。内外面に施釉。みこみに目跡あり。348～350は瓦器椀。348は高台ハクリ。349は内外面回転ナデ後ミガキだが、内面は埋土が沈着し不明瞭。351は瀬戸捕鉢。胎土は径1mmの黒色砂、径2～3mmの白色砂粒を少量含む。底面に墨書き(花押)(Ph14)。352は白磁皿。みこみ内面、施釉上に墨書き(Ph16)。353は青白磁合子蓋。蓋上面に同心円文。354～356は白磁皿。357は青銅製キセル。先端部スス付着。胴部に合わせ目あり。358は黒色蚌石。359は鉛製弾丸。360・361は青磁動物脚部。361は底部付近に接合痕あり。362は象嵌青磁碗。みこみと胴部外面に象嵌。363・365は土錘。365は全体摩滅。364は軽石製浮。外面はやや風化。366は坩堝で、内面に緑青が付く。367はガラス製小壺。鮮やかな水色。368・369は滑石製品。368は石鍋転用鉢。369は温石。370～372は弥生土器甕(Ph27)。ローリングを受け、調整不明瞭。373は土師器小型丸底甕。外面はハケ後粗いミガキを施す。内面ナデ。胴上部に接合痕あり。374は甕底部。375～379は环B。

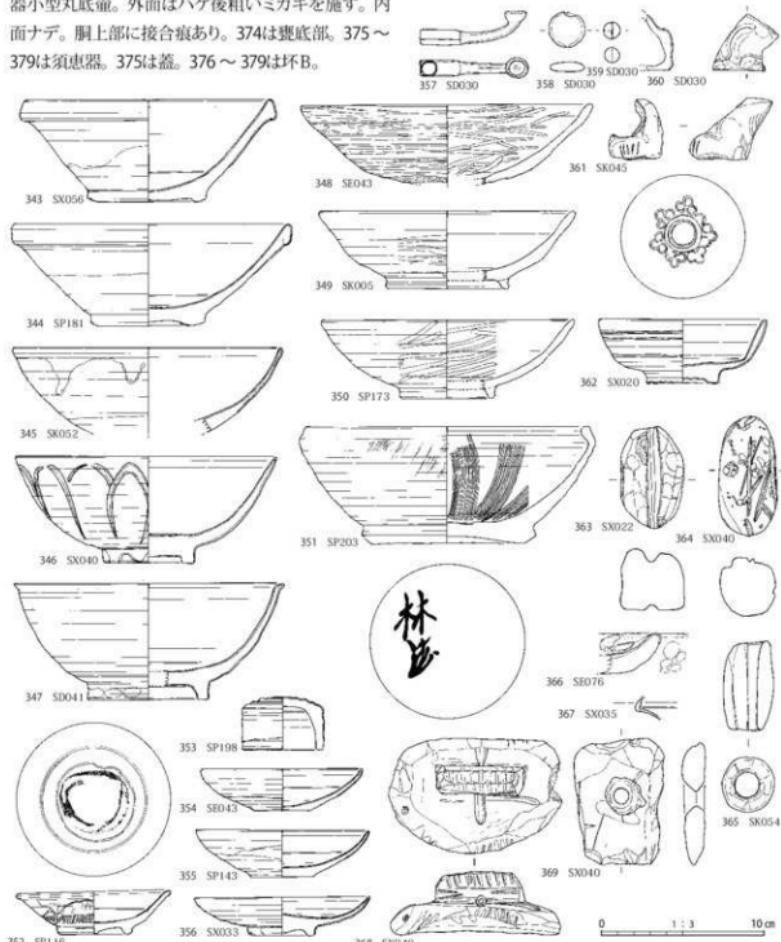


図28 その他遺構出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

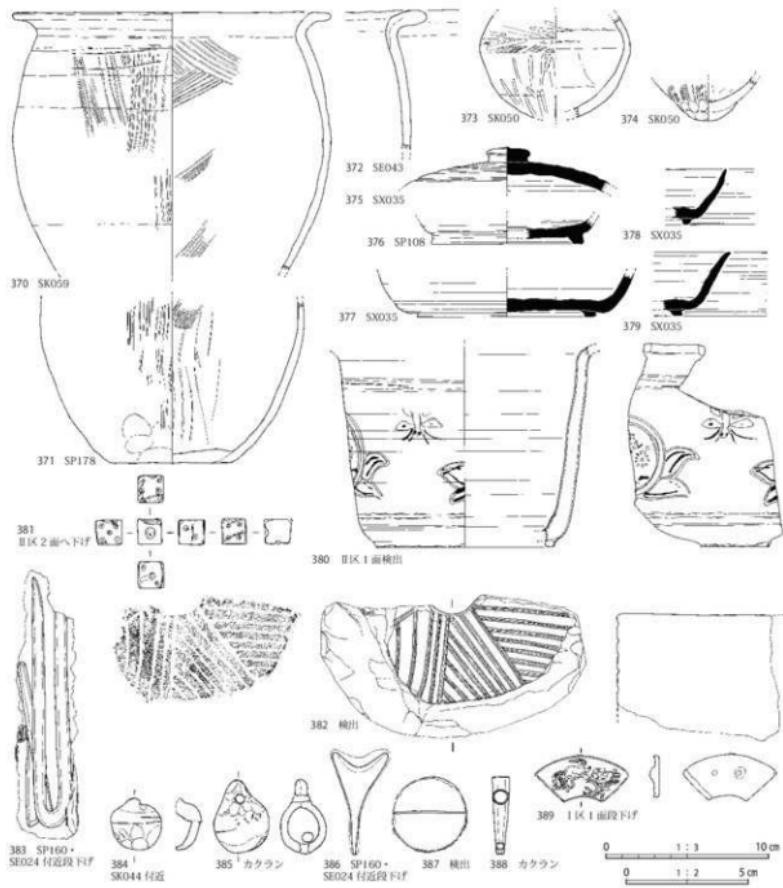


図29 その他遺構・遺構外出土遺物実測図 ($S = 1/3$ • 389 は $S = 1/2$)

遺構外出土遺物(図29) 380は高麗象嵌青磁瓶か鉢。底部は粘土を付けたし高台を接合する(Ph.25)。381は滑石製子。表と裏の和は7にならない。382は火山岩製粉挽臼。色調は表面青灰色、断面黄灰色で、径3~5mm程度の白色・黒色鉱物を多く含む。383は棒状鉄製品で火箸か。エックス線写真をもとに図化したが、説明が激しく、推定作図。外面に木質が付く。384・385は土製鉈。385は完形品。386は雁又式鉄鎌。鋸彫れで本来の厚みがわからず、断面未作図。387は鉄製円盤。388は青銅製キセル。389は銅製扇形金具。有機質などの付着なし。

IV 結語

1. 本調査地点の成果

- ① 第217次調査地点で確認した遺構の初現は、11世紀後半～12世紀前半である。ただし、遺物では弥生時代中期初頭以降から奈良時代の遺物が出ており、当該期の生活痕跡がうかがえる。
- ② 主たる遺構は溝で、そのうちSD001・002・019・070・073は、既調査で検出した博多の「メインストリート」（大庭2009）の側溝か、関連する溝と考える。道路遺構は未検出である。
- ③ 周辺の調査成果から想定した築地塀に関連する遺構は未検出である。
- ④ SD001を中心に鉄滓がパンケース60箱以上出土した。SD001の掘削時期を考慮すれば、15世紀以降の聖福寺門前町における鍛冶が想定できる。ただし、鍛冶関連遺構は未検出である。

2. 中世都市博多の「メインストリート」と聖福寺

博多遺跡群ではこれまでに10筋以上の道路を検出しており、とくに35次調査の道路側溝（13世紀末～16世紀末）は、博多浜と息浜をつなぐ博多の「メインストリート」である（大庭2009）。本調査区のSD001・002・019・070・073は、①その延長上で、②想定期間に収まるため、「メインストリート」の側溝か、それに関連する溝と考える。なお、対をなす側溝の延長は62次調査で出ている。また、「聖福寺古図」や既調査成果によれば、本調査区付近は聖福寺築地塀の推定ライン上にあたるが、塀関連の遺構は未検出である。

3. 聖福寺門前における鍛冶

本調査地点では、SD001を中心に鉄滓や羽口、坩埚が出ており、総数でパンケース60箱以上出土した。中世末から近世の金属生産が想定できる。博多遺跡群の金属生産は、中世以前では祇園町付近（65次調査ほか）で古墳時代前期の輪羽口・橢円形等などが出ており、精鍛鍛冶の存在が伺える。一方、中世以降では綱場町（42・60次）・店屋町（56・61・85次）・上呉服町（築港線1・3次）・冷泉町（97次・148次）・御供所町（48・62次）で、金属生産遺構が確認できる（比佐2008）。なお、本調査区の周辺では、62次調査で12世紀後半～13世紀初頭の青銅溶解炉を検出し、177次調査では近世の大溝から坩埚や羽口、鉄滓など鍛冶関連遺物が出た。

1800年頃の様子を描いた「福岡城下町・博多・近隣古図」によれば、本調査地点周辺は「金屋小路町」にあたり（宮崎編2005）、中世末から近世には博多鍛物師の磯野家が居住した記録が残る。「磯野吉佐衛門」は、太宰府の住人九州鍛物師の藤野・藤佐衛門のもとで「鍛物職」を修め、永禄年中（1558～1569）、博多聖福寺前久保小路に居住して鍛物職を営んだ（久保小路は聖福寺境内の町並であったが、町割りの面に取上げられたり鍛物職の住む所であるから金屋小路に改めになったと、聖福寺にある元亀年中（1570～1572）の古券帳にあるといふ）（中村2013：p.150・註1）。以上の文章は、本調査地点の金属生産遺物出土遺構の時期と概ね合致し、興味深い。また、金屋小路が太閤町割り以前の「久保小路」であれば、「安山借家櫻」の「窪少路」は、「久保小路」にあたると思われる。このばあい、宮本雅明の復元案とは異なる見解になり、境内の町並み復元も再考が必要である。

以上、本調査では中世後半の聖福寺町・街区の復元や、中世から近世の転換期における職人の様相をあきらかにするうえで重要な成果を得た。

註

- (1) 宮野弘樹氏によれば、中村順子氏の解釈（2013）は、「久保小路が金屋小路に改められた。古券帳にも（久保小路が）載っている」とも解釈できるといふ。

参考・引用文献

- 伊藤幸司 2008「博多の寺社」大庭康時ほか編『中世都市・博多を掘る』海鳥社 pp.224-233
- 伊藤幸司 2010「『聖福寺古図』解説」西谷正浩編『新修 福岡市史』(資料編 中世①市内所在文書)
- 大庭康時 1993「聖福寺一丁目2番地—中世後期博多における街区の研究(1)ー『法哈噃』2 pp.1-28
- 大庭康時ほか編 2008『中世都市・博多を掘る』海鳥社
- 大庭康時 2009『中世日本最大の貿易都市・博多遺跡群』(シリーズ「遺跡を学ぶ」061)新泉社
- 岡崎 敏 1968「福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物についてー大陸船載の陶磁と銀瓶ー」『九州文化史研究所紀要』13 pp.1-28
- 鮑山 猛 1971「「中世町割りと条坊造制(上)」『史蹟』105・106合冊 pp.39-59
- 佐藤正彦・三木隆行 2007『聖福寺の建造物』(福岡市文化財叢書第2集)
- 下山正一 1989「福岡平野における岡文海進の規模と第四紀層」『九州大学理学部研究報告(地質学)』16 (1) pp.37-58
- 下山正一 1999「福岡平野の岡文海進と第四紀層」小林 茂ほか編『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために』九州大学出版社 pp.11-44
- 杉山未菜子 1999「博多銘物館」『福岡市博物館常設展示(部門別) 解説リーフレット』156
- 中村順子 2013「礪野五兵衛とその一族」『礪野五兵衛覚書 近世博多年代記』(地域史資料叢書 第三輯) pp.149-155
- 西谷正浩編 2010『新修 福岡市史』(資料編 中世①市内所在文書)
- 比佐陽一郎 2008『金属製品』大庭康時ほか編『中世都市・博多を掘る』海鳥社 pp.216-222
- 福岡市教育委員会文化課 1976「博多を掘る」(地下鉄と文化財第1号)
- 宮崎克則編 2005「古地図の中の福岡・博多 1800年頃の町並み」海鳥社
- 宮本雅明 1991「中世後期博多聖福寺境内の都市空間構成」『建築史学』17 pp.2-24
- 森本幹彦 2017「弥生・古墳時代の博多湾沿岸に流入した中国鉢」『福岡市博物館研究紀要』26 pp.15-24

表2 出土銭一覧

銭No.	出土遺構	銭名	特記事項
1	SD001粘質土層下層	□□□□	
2	SD001東側鉄滓含層	□□□□	
3	SD001燒土・鉄滓層	大□通寶	
4	SD001東側(南)一段下	□□□□	
5	SD001東側立ち上がり付近	□□曹寶	
6	SD001燒土・鉄滓層	天□□寶	
7	SD001西側鉄滓層	□□□□	3枚重
8	SD001西側鉄滓層	□□□□	3枚重
9	SD001西側鉄滓層	□□□□	
10	SD001	□□□□	
11	SD001	□□□□	2~3枚重
12	SD001	□元寧寶	
13	SD001	□□□寶	
14	SD001	□宋通寶	
15	SD001	太□□寶	
16	SD001	熙元通寶	
17	SD001	洪□通寶	
18	SD001ベルト	□□□□	6枚重
19	SK006	神元符寶	
20	SK006	治平通寶	
21	SK006	□觀通	
22	SK006	元□通寶	
23	SK006	貨泉	
24	SK017	□□□□	
25	SK017	□□□□	
26	SD046	□□□□	
27	SX064	開元通寶	
28	SX064	朝鮮通寶	
29	SX064	□□□□	
30	SX064	□□□□	
31	SD070上層粘質土	開元通寶	
32	SP115	元□通寶	
33	SP206	□□□□	
34	SD012東側1段下げ	□元□□	2~3枚重
35	SE024-SK025付近段下げ	永樂通寶	
36	SP140・141付近下げ	□□□□	2~3枚重
37	I区第1面清掃	□□□寶	
38	I区北東一段下げ	□□□□	2枚重
39	I区第1面検出	□元□□	
40	I区第1面検出	□元和寶	
41	I区第1面1段下(西半分)	□□□□	
42	I区第2面へ下げ	永樂通寶	
43	I区第2面へ下げ	景元祐寶	
44	I区第2面へ下げ	□□□□	
45	中央トレンド横2面へ下げ	元□通寶	
46	中央トレンド横2面へ下げ	□□□□	
47	ラベル無	紹元□寶	
48	ラベル無	□□□□	
49	ラベル無	□□□□	
50	ラベル無	□□□□	

三

附1 博多遺跡群第217次調査出土の動物遺存体

屋山 洋（福岡市埋蔵文化財課）

217次調査区は博多区御供所町に位置し、周辺は鎌倉時代以降聖福寺や承天寺など多くの寺院が建ち並ぶ地域である。調査地点は聖福寺の道を挟んだ南西側に位置しており、江戸時代には鍛冶職人が住んで金屋小路町と呼ばれるが、家伝では16世紀中頃に住み着いて鍛冶を始めたとしている。

出土した動物遺存体は掘り下げ時に目視で確認したものを取り上げたもので、筛による水洗洗浄などは行っていない。出土数が多いのはSD001と019がそれぞれパンケース1箱で、その他は数点ずつの出土である。遺物詳細はP30の表4に記載した。

SD001 15世紀から近世にかけての溝で、鉄滓がパンケースで60箱と多量に出土した。出土した骨はイルカ・クジラ類の頭骨と歯の小片と椎骨で、椎骨は突起をすべて切断されている。椎骨径から大～中型のイルカ類と推定される。

SD019 12世紀中頃から15世紀にかけての溝である。骨は底面から20～30cm上で平面状に分布し、分布は調査区外に延びる(Ph.10,12)。出土した骨は1点を除いてイルカ・クジラ類の頭骨と椎骨で、下顎や前鱗はみられない。頭骨は多くが5～10cmの破片で調査後細片化が進んでいる。正確な部位は不明であるが、吻部から後頭骨までを含み、数点に切断痕らしき傷と犬の咬痕を確認した。歯は径1.5cm、長さ約7cmと径0.7cm、長さ2.5cmの2種類が出土しており、少なくとも2種類の頭骨を含む。椎骨は頸椎から尾椎までの各部を含む。椎体長は1cm～12cm超と幅広く中～小型の複数種の骨が混じるが、ほとんどが突起類がない椎体だけの出土で、数点に椎弓の根元が残る程度である。突起類は刃物で切断され、椎体側面や前後の関節面にも刃物痕がみられる。また胸椎は出土するが肋骨がほとんどみられないのも注目される。0029はエイ・サメ類の椎骨である。径4cmを測る。中心軸部に径4.3mmの孔があるが、孔の縁には刃物で削った鋭利な段が残り人為的な穿孔であることが判る。軸部に穿孔があるエイ・サメ類椎骨は今までに数点出土しているが、そのうち95次で出土した1点は孔に木の棒が差し込まれた状態で出土したため独楽として使用したと考えられており、0029も同様に独楽などとして使用されたものと思われる。

その他の溝、土坑から出土した動物遺存体もほとんどがイルカ・クジラ類の頭骨片と椎骨である。
まとめ イルカ・クジラ類の骨は13世紀以降の博多遺跡で多く出土する。本調査地点は博多遺跡でも南半部にあたり、当時の海岸からは1kmほど離れているため1次的な解体場所としては不適であり、海岸近くで解体したものを持ち込んだと思われる。18世紀後半に唐津藩が作成した『肥前国産物図考』では海岸で頭・胴・尾の3つに切断したものを船や馬で運搬しているのが描かれているが、博多遺跡でみられる椎骨がつながった状態での出土例からすると、それに近い状態で街中に持ち込まれたと考えられる。ただ、そのまま最終消費地に持ち込むと下顎や前肢、肋骨も多少は出土するものと思われ(他の調査地点では下顎・肋骨は少ないものの出土している)、217次調査区での出土部位が頭骨・椎骨に偏り下顎・前肢・肋骨がみられないのは、更に細かく解体したものが持ち込まれたのではないだろうか。頭骨は脳やメロン体など油脂を多く含むため、油の採取を目的として集落内に持ち込まれた可能性も考えられ、SD019の出土状況からも脳を取り出すため、また骨から油を取りやすくするために細かく碎いたものと推定される。

表4 出土動物遺存体一覽

附2 博多遺跡群第217次調査出土資料の保存科学的調査

松岡 菜穂・比佐 陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

1.はじめに～対象資料と調査の目的

博多遺跡群第217次調査では、出土資料のうち非鉄金属製品、ガラス製品、生産関連遺物を対象として、非破壊手法による保存科学的調査を実施した。

今回、調査を行った資料は非鉄金属製品（扇形飾金具、鉛玉、不定形金属製品）3点、ガラス製品（小玉、容器片）3点、坩堝片5点、計11点である。調査目的は、非鉄金属製品については、構造と材質、加飾の有無の推定、ガラス製品は、材質と製作技法の推定、坩堝片は溶解した金属の推定である。

2.調査方法

本調査では、肉眼観察後、調査目的に応じた機器を使用し非破壊手法による観察と分析を実施した。分析前処理として、資料表面の土や不必要な鉛をアルコールで洗浄を行った。今回の対象資料は土に埋まっていた考古資料であることから、材質の組成は不均一であり、汚染や変質の可能性を前提とした調査と考察を行った。

調査に使用した機器と目的、分析条件は、以下のとおりである。

- ・実体顕微鏡観察（資料表面の拡大観察）…ZEISS Stemi3500
- ・デジタルマイクロスコープ（資料表面細部の拡大観察）…HYROXKH-8700
- ・透過X線撮影（資料内部の構造の推定、加飾や付着物痕跡の有無の推定など）…YEXLON MG226
- ・微小領域用エネルギー分散型蛍光X線分析（資料表面の材質分析）…AMETEK EDAX Orbis
環境：真空・大気、電圧：50KV・30KV、電流値：任意、測定時間：180秒、照射径：1mm、0.3mm、管球：ロジウム、
- ・走査型電子顕微鏡（資料表面微細部の拡大観察と材質分析）…FEI Quanta250 FEG

3.結果と考察

調査結果を、資料ごとに報告する。

（1）扇型飾金具 遺物番号389

この飾金具は、扇形の地板、獅子と花形の飾金具、飾り金具を地板に留める釘で構成されている。それぞれの部品に対して、材質調査を行った結果、地板と獅子の飾り金具はほとんどが銅で、花形の飾り金具からは銅を主体として微量に鉛が検出された。煮色などの表面処理の可能性を考え、硫黄の検出に注目したが顕著にピークが出ている様子がみられないため、表面処理については現状不明である。

（2）鉛玉 遺物番号359

白色で小さな球状を呈し、鉄砲玉とみられる資料である。表面は粉状化しており、球体の中ほどに鋳型の合わせ目とみられる線が確認できる。分析の結果、鉛が顕著に検出され、次いでアンチモンが明瞭に認められた。

アンチモンは国内では愛媛県の市之川鉱山が、輝安鉱として産出しており、時期的な整合は実証できないうが、『続日本紀』によると、文武天皇2年（西暦698年）に、伊予国（愛媛県）から白ろう（輝安鉱）を献上したことが知られている（香取1932、成瀬1999）。アンチモンを含む古代の資料として正倉院のアンチモン塊や富本鉄、平城京九条大路出土海獸葡萄鏡の存在がある（成瀬1999）。今回のアンチモンは、微量元素というには検出量が多く、意図的な添加や、精錬後の廃物利用の可能性も考えられる。

（3）不定形金属製品 遺物番号128

白色で不定形を呈する製品である。表面は粉状化しており、分析の結果、ほとんどが鉛で、アンチモンの検出はない。

（4）ガラス小玉 遺物番号25

透明で淡青色を呈する小玉である。観察の結果、孔に対して弧を描くように気泡の筋がみてとれることから、熱したガラスを何らかの芯に巻きつけて作られたものと考えられる。

分析の結果、カリウムとカルシウムがおむね同程度の検出がみられることからカリ石灰ガラスと考えられ、着色剤は銅が推定される。先行事例では近世に広く流通すると示されており（肥塚1999）、これまでに博多遺跡群におけるカリ石灰ガラスの分析事例をあるものの（比佐2009）、出現時期など詳細は不明である。

（5）ガラス連玉 遺物番号 127

失透で淡青色を呈する連玉である。製作技法は判然としないものの、気泡の流れからガラスを引き伸ばした後に、一定間隔でガラスを絞ることで連玉を製作していると考えられる。連玉を切断後、小口面の研磨作業を施していないようすがみてとれる。また、細片と粉状を呈する黒色の介在物がガラス内部に散見されるのが、特徴である。

蛍光X線分析の結果、ケイ素に次いでカリウムと鉛が突出していることから、中世に一般的なカリウム鉛ガラスと考えられる。

（6）ガラス容器片 遺物番号367

失透で淡青色を呈する容器片である。ガラスの流れなどから吹きガラスの技法により製作されたと見られる。口縁部分の破断面で色調が淡青色と、やや黄緑がかったものが二層になっている部分が観察されるが、結果に大きな差異は認められない。カルシウムのピークがカリウムを上回る結果は、一般的なカリウム鉛ガラスの組成とは異なる結果となっているが、これが風化に起因するものなのか、あるいはガラスの種類が從来認識されているものと異なるのかという問題については、今回の調査では言及し得なかった。

（7）坩堝片 遺物番号22・122・123・124・366

本調査地点からは、金属の加工に用いられたと見られる坩堝片が5点出土している。これら金属生産関連遺物の調査は先行研究（齊名2014）を参考にして行った。

まず透過X線撮影では、123において明瞭に粒状の透過度が低い部分と、内面全体に広がる影がみられた。これらは何らか重元素の存在を示すものである。顕微鏡観察では粒状の部分が黒銀色を呈しており、この部分の蛍光X線分析で鉛が検出されたことから、銀粒子が付着したものと考えられる。

この坩堝では銀の他に金属加工に関わると見られる元素として、鉛、ビスマス、臭素、銅などが認められる。この内、臭素は銀の腐食に伴うもの、鉛は銀の精錬による生成物、またビスマスも銀鉱山に由来する微量元素と考えられる。ビスマスを含む銀鉱石は石見銀山が知られており（村上ほか2007）、この元素の検出は、坩堝で精錬された銀が石見銀山の鉱石を原料とした可能性を示すものと見られる。

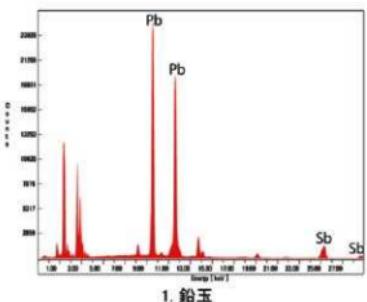
他の坩堝は、材質分析の結果から、22が銅一鉛、366は銅一鉛一スズ、122、124は銅一鉛一スズ一ヒ素の加工（溶解）に用いられたものと推測される。

4. おわりに

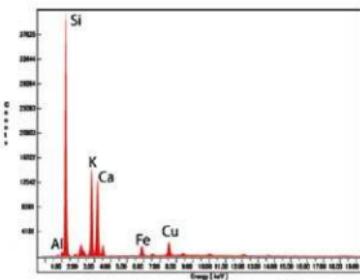
調査の結果、アンチモンを多く含む鉛玉やビスマスを含む銀の精錬作業に用いられた坩堝の存在を明らかにすることができた。博多における金属加工を考える上で、重要な資料といえる。

参考文献

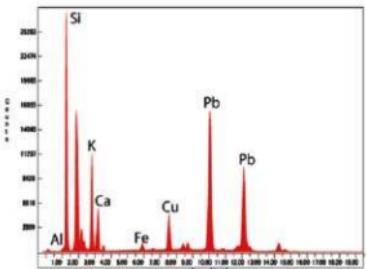
- 香取秀真 1976『金工史談 正編』国書刊行会
齊名貴彦 2014「IV章 自然科学的調査（非破壊分析）」『大内氏関連町並遺跡8 第11・15・19・24次調査と金属生産関連遺物の自然科學的調査』山口市教育委員会 pp.180-204
肥塚隆保 1999「江戸時代のガラス」『日本の美術9 No.400 美術を科学する』
成瀬正和 1999「白銅塊の正体」『正倉院学ノート』朝日選書623 pp.275-278
比佐陽一郎 2009「博多遺跡群第161集調査で出土したガラスと156次調査出土の椎について」『博多126 博多遺跡群第161次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1038集 福岡市教育委員会 pp.33-44
村上隆・横山精士・高田闇・中田健一・遠藤浩己・大國晴雄・足立克己 2007「近世の銀精錬技術、「灰吹法」に関する材料科学的検証…石見銀山遺跡出土遺物を中心…」『日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集』 pp.108-109



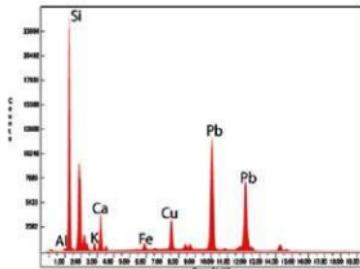
1. 鉛玉



2. 淡青色ガラス小玉(カリウム鉛ガラス)



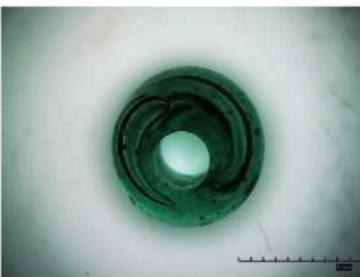
3. 淡青色ガラス連玉(カリウム鉛ガラス)



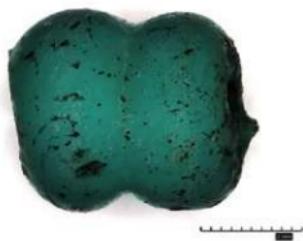
4. 淡青色ガラス容器片(カリウム鉛ガラス?)



5. 鉛玉



6. 淡青色ガラス小玉

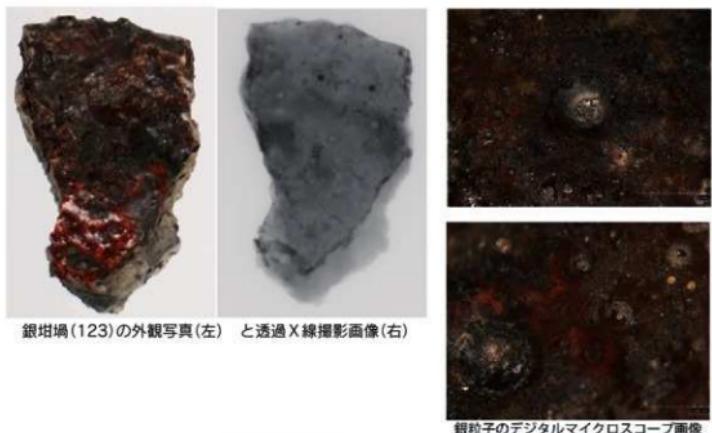


7. 淡青色ガラス容器片

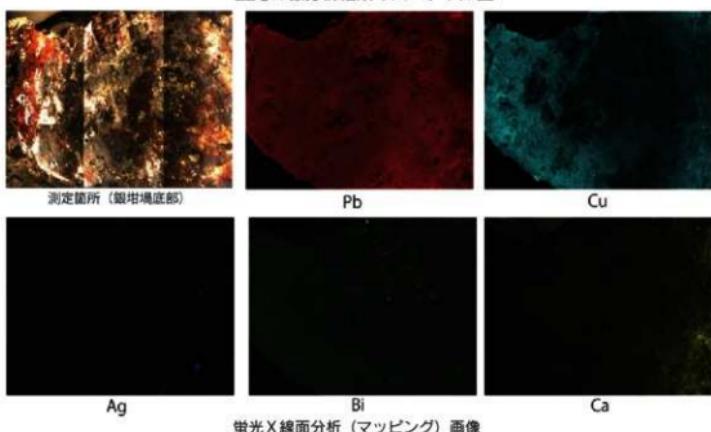
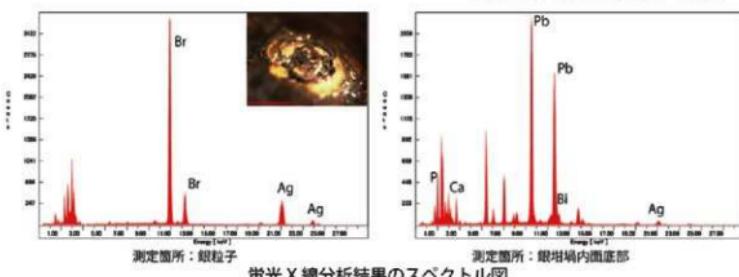


8. 淡青色ガラス容器片

博多217次調査出土資料の保存科学的調査
(上2段は蛍光X線分析のスペクトル図、下2段はデジタルマイクロスコープ画像)



銀粒子のデジタルマイクロスコープ画像





Ph.2 調査区出土金属生産関連遺物

写真図版



Ph.3 II区第2面全景(西から)



Ph.4 I区第1面全景（北東から）



Ph.5 I区第2面全景（北東から）



Ph.6 SD001 完掘状況（西から）



Ph.7 SD001 B-B' 土層断面（北西から）



Ph.8 SD002 C-C' 土層断面（北西から）



Ph.9 SD002 D-D' 土層断面（北西から）



Ph.10 SDO19 動物遺存体出土状況（南西から）



Ph.12 SDO19 全景（北西から）



Ph.11 SDO70 E-E' 土層断面（南東から）



Ph.13 II区第2面全景（上空から）



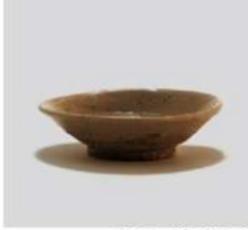
Ph.14 351 (SP203)

Ph.15 199 (SD070 暗褐色黏質砂)



Ph.17 171 (SD012)

Ph.18 172 (SD012)



Ph.16 352 (SP116)

Ph.19 311 (SK009)

Ph.20 113 (SD001)



Ph.21	Ph.25
Ph.22	Ph.26
Ph.23	
Ph.24	Ph.27
Ph.28	



Ph.21 189 (SD019)
Ph.22 134 (SD001)
Ph.23 177 (SD012)
Ph.24 23 (SD001)
Ph.25 380 (II区第1面検出)
Ph.26 玩具集合
Ph.27 370 (SK059)
Ph.28 錢 23 (SK006)

報告書抄録

ふりがな	はかた 169							
書名	博多 169							
副書名	博多遺跡群第217次調査報告書							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1398集							
編著者名	比佐陽一郎・松園菜穂・屋山 洋・神 啓崇(編)							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2020(令和2)年3月25日							
博多遺跡群	ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	福岡市博多区 御井町 264・265・266番	40132	1734	33°35'47"	130°24'47"	2017.11.27 — 2018.03.13	232m ²	集合住宅建設
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落	中世	溝/井戸/土坑/柱穴	須恵器/土師器/貿易陶磁器/金属製品					
要約	博多遺跡群は、玄界灘に面する博多湾岸の砂丘上にある。中世を主しつつも、弥生時代から近世まで継続する複合遺跡である。本調査地点は聖福寺の南西に位置し、太閤町割り（1587年）以前は聖福寺の境内にあたると推定される。検出遺構は中世の溝6本、井戸6基、土坑・柱穴多数である。特筆すべきは東西方向に走る5本の溝で、いずれも博多遺跡群第35次調査で出たメインストリートに並行し、太閤町割り以前の状況を示す。また、SD001ではパンケース60箱分の鉄滓が出ており、鍛冶場は検出できなかったが、中世後期から近世にかけての鍛冶関連施設を推測させる。							

博
多
169

— 博多遺跡群第217次調査報告書 —
 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1398集

2020年3月25日

発 行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8-1
 印 刷 松古堂印刷株式会社
 福岡市西区周船寺3丁目28-1

